

## 伝承資料集成

# 米沢市立米沢図書館蔵『やしろじんじやれいけんぎ屋代神社霊蹟記』の翻刻と考察

——山形・新潟の弥三郎婆伝説——

錦

仁

## 妙多羅天を祀る

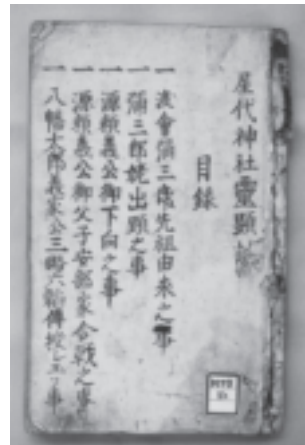
山形県高島町一本柳に鎮座する屋代神社の由来を語る『屋代神社霊蹟記』の全文を翻刻し、考察を加える。本書は米沢市立米沢図書館に蔵されている（郷土資料・K175/Ya）。竪二十三・四×横十四・七センチ。楮紙を二つに折って袋綴じにした一冊本で、墨付き本文七十五丁（一面八行）から成る。奥付は記されてなく、書写年次等は不明である。表紙・裏表紙はともに剥奪。糸の綴じ目に一部が残るが、本文と異なる厚めの料紙（茶色）であったことがわかる。見返し、または裏表紙に、奥書のようなものがあつたかもしれない。本書は今のところ他に写本を見いだせない。唯一存在する原本と見たい。

本書の成立・書写年などは、奥書がないので正確には不明とするほかない。かつて筆者は筆跡と料紙から江戸末期と想像してみたのであるが（「鬼婆伝説―敗者の悲しみ」平成十一年十一月十三日、山形新聞・連載〈ふるさとの物語―生と死―〉第七回）、明治以降の成立と考えたほうがよいという意見も耳にした。

そこで確証を得るため、最近、高畠町郷土資料館の主任・安部温さんに「ご教示をお願いしたところ、「妙多羅天堂」(写真)の棟札を翻刻した書類を送ってくださった。それを見ると、文政十一年(一八二八)三月十八日に再建されたと記されている。「大工 市川九右衛門、同 高橋周次、一村惣若者 中」とある。これと符合するのは、本書末尾の次の一文である。「妙多羅天 ト神号ヲ拝シ奉ル。数暦ヲ経テ破レ、新ニ奉再建、神助ヲ仰グ神ハ……」。文政十一年に

堂社を再建したとき、この縁起書を作成したと見て間違いないまい。料紙・筆跡なども時代的に矛盾しない。この縁起書は、たしかな史実にもとづいているわけではないが、神社の創建を江戸時代を遠くさかのぼる古い時代に設定し書いている。縁起書の作成者は、堂社再建に際し、高畠町屋代地区に伝わる伝説をもとに、新潟県弥彦村の紫雲山宝光院(真言宗)に祀られている妙多羅天にまつわる弥三郎婆伝説をとりこんで、新たな観点から壮大なモノガタリを書き上げたのである。

本書は、その名のとおりの山形県高畠町一本柳にある屋代神社の縁起書であるが、最後まで読んでいくと、実はそうではなくなってしまう。末尾に、「是ヨリ大坂屋(ハ)マス／＼繁昌シ、夜彦ノ弥三郎姥ガ神通ナリ、ト弥左衛門(ハ)尊敬シテ、伊夜日子大明神ノ社内ニ宮殿(クウデン)ヲ建立致シテ、妙陀羅天ト祭り奉ル」とある。それまでのストーリーは後述するが、鬼婆と化した弥三郎の母が改心し、与板の弥左衛門の息子比平のために大風に乗せて美女を連れ



妙多羅天堂

てきた。摂津国大坂の三輪屋久右衛門という富有者の娘ヲエツである。その後、娘が越後国の与板にいることを知った久右衛門は、番頭を遣わして娘と比平を大坂に呼び寄せた。そして比平の誠実な人柄を認めて結婚させ、大坂屋弥左衛門を名乗らせた。やがて弥左衛門は与板の領主に仕え、八百石を与えられ、三輪比平と名乗ったという。これが本書の結末である。

というわけで、本書は最終的に、越後国与板の三輪家が弥三郎婆の神通力に感謝し、弥彦神社の境内に小社を建て妙多羅天を祀った、ということを書いた縁起書になっている。山形県高島町一本柳の屋代神社の由来を記した縁起書がすであって、それを改編し、最後に右の結末をつけて三輪家の事績としたのであろう。当家は妙多羅天を祀る宝光院の有力な旦那・支援者であったのではなからうか。

## 本書のストーリー

本書のストーリーを述べてみよう。大きく四部構成になっている。

**第一部**——「渡会弥三郎（ノ）先祖由来之事」「弥三郎姥、出顯之事」「源頼義公、御下向之事」「源頼義公御父子（ト）安部家（ノ）合戦之事」

出羽・奥州の領主、安部大夫頼良よりよしの家に、渡会弥太郎平時宣ときふがいた。山形県高島町の屋代郷に五千貫の土地を与えられ、一本柳村の平潟城に住んでいた。妻は厨くりやがわ河左衛門の娘萩野姫はぎのひめで、その間に産まれた男子は学識・武力ともに優れ、親孝行であった。鳥海前司安頼を烏帽子親に渡会弥太郎安宣やすのぶと名乗ったが、太守の安部頼良が渡会大内蔵平安宣おおくと改名してあげた。やがて父時宣が死去した。

父の喪中、東の山から大きな猫が飛んできて、四方を睨んでいる夢を見た。安達仙伯あたつせんはくに占わせると、猫は鼠

賊を平治するものであり、東山に狩に出かけてみるべし、と進言した。東の方角の岩井戸という高山に登ると、頂上の猫鼻という平地で数十人の天女が音楽を奏でていた。近づくと一緒に飛び去ったが、一人だけ逃げ遅れて泣いていた。その天女を連れて帰り、岩井戸姫（岩井戸御前）と名づけ、妻とした。その間に男子が産まれた。弥三郎という。

永承六年（一〇五二）、源頼義が鎮守府（將軍）に任ぜられ、奥州にやってきた。領主の安部大夫平頼良は街道の掃除や橋の架け替えなどを行って精勤した。名前が頼義と同音なので頼時と改名した。その子息に貞任・宗任・直任・保任・守任などがいた。保任は、厨河左右衛門の跡継ぎに入り厨河四郎保任と名乗り、衣の館に住んだ。その跡が今も残っている。

津軽・青森に宇堂左馬之佐安方という一城のあるじがいた。その娘錦木は奥州一の美女であった。頼時の長男貞任の妻となる約束を交わしていたが、源頼義が美女の噂を聞いて無理に呼び寄せ、寵愛した。頼時とその一族は、権威を誇り、色を好み、礼儀を乱す頼義に激怒し、戦う決意をした。出羽国置賜の地は戦場となった。源頼義の長男義家は屋代の要害に、安部貞任は高峯に陣を張った。激しい戦いの末に、義家が勝った。頼時は流れ矢の疵が治らず、天喜四年（一〇五六）九月五日、死亡した。義家は宗任を囚人として捕らえ、上洛した。宗任は貴族たちの前で即興の和歌を詠み、教養の高さを示した。

## 第二部 —— 「八幡太郎義家公、三略六韜（ヲ）伝授シ玉フ事」「源義家公、後三年（ノ）戦（ヒ）之事」

源頼義は、鳩峰（高島町）の男山八幡宮に祈願して男子を授かった。八幡宮の申し子なので八幡太郎と名づけた。義家である。

あるとき、京都の大江師房が内裏の文庫の中で「三略六韜」という軍書を見つけて、義家に献上した。この軍書は神功皇后が唐土から取り寄せたものである。義家は康平三年（一〇六〇）屋代の阿久津村に着陣し、安

部・渡会一族（平家）と戦った。なかなか勝てなかったので七つの陣地に八幡神社を建立し、戦勝を祈願した。その甲斐あって、鳥海<sup>とりうみ</sup>弥太郎平安頼（鳥海前司安頼とも）、安部貞任、厨河四郎平保任らを滅亡させた。後三年の戦いである。前九年の戦いでは功を収められなかったが、ここで勝てたのは「三略六韜」のおかげである。義家は文徳・達徳の名將と褒め称えられた。

第三部——「巖（岩）井戸御前（ト）弥三郎、民間二落（ツ）ル事」「弥三郎、武者修行之事」「弥三郎、三略六韜ヲ得ル事」「弥三郎母岩井戸、鬼女ト成（ル）事」「白山大権現岳（ノ）跡之事」「弥三郎、古郷エ戻ル事」

安部一族とともに、その臣下である渡会大内藏平安宣も戦死した。十五〜七十歳の男はみな戦死した。よって、父時宣の妻萩野姫（厨河左衛門の娘）は、安宣の妻岩井戸姫（天女）に、「弥三郎（十三歳）を連れて民間に隠れよ。いずれ一族郎党を集めて旗を揚げ、一家を再興せよ」と命じた。萩野姫とともに男たちの妻六十人あまりは建物に火を放ち、自害した。生き残った男たちは山野に逃れ、田家に隠れ、散り散りに落ち延びた。かくして平和は戻った。弥三郎は二十歳になり、旧臣の娘と結婚し、男子が産まれた。残党を集め、君父のために弔い合戦をしようと思うが、「三略六韜」がなければ勝てない。母（岩井戸姫・御前）と相談し、武者修行の旅に出てこの軍書を手に入れて帰ってくるようになった。常陸国、鹿島神宮、香取、京都を旅して剣術を磨いた。京都では大江家に住み込み「三略六韜」を探したが、見つからない。そこで唐土に行つて手に入れようと思い、長崎をめざした。途中、豊後国の宇佐八幡宮に参籠したところ、白髪の老人があらわれて大宰府の大林寺に行けという。大林寺に住み込み人々と親しくなると、弥三郎のために住職が寺蔵の「三略六韜」の講義をし、書写を許してくれた。こうして手に入れることができた。

故郷では、弥三郎が留守の間、妻も子も病死した。悲嘆のあまり弥三郎の母（岩井戸姫・御前）は気が狂い、

白髪の鬼女と変じた。弥三郎の軍用金をつくるため盗賊の頭となり、オオカミを使い旅人を襲い、金品や衣服を奪い取った。遠国まで飛行し、人を殺して血を吸い、オオカミに死骸を与えるようになった。

このころ屋代では日照りが続いた。人々は総鎮守の「大屋代の宮」（屋代神社）に祈願したところ、神霊があらわれ、「白子山の岩窟に鎮座する白山姫を信仰せよ。いま世の中を騒がしているのは赤帝の御子である。これは白帝の御子である」という。まもなく白子山から光り物が飛んできて、屋代神社の境内にある社殿に入った。これを白山大権現という。その後、豊作が続く人々は安楽に過ごした。

弥三郎が故郷の屋代に帰ってきた。衣服を改めて村に入ると盗賊が出てきた。これをやっけるとオオカミが出てきた。木に登って防いだが、白髪の鬼女があらわれて弥三郎を引き下ろそうとする。弥三郎は母とも知らず、その腕をバツサリと切り落とした。

家のまわりは荒れ果てていた。中では母がうめき声をあげている。腕を見せると母は突然、屋根の上に飛び上がり、鬼女に変じた事情を語り、越後国の弥彦山へと飛び去った。

弥三郎はなんの因果かと悲しんだ。残党を集めて源家に戦いを挑み、一族を再興しようとしてきたが、すべて水泡と帰した。世は平和に治まっている。まもなく弥三郎は病気にかかり、亡くなった。再興を誓った残党の人々も後追いの自害をして果てた。

#### 第四部 —— 「弥三郎姥、与板（ノ）弥左衛門二女房ヲ授（ク）ル事」

新潟県の与板（長岡市）に、弥左衛門という貧しい男がいた。早く亡くなったので、息子の比平が名を継いで母と二人で暮らしていた。親孝行な息子であった。母が病気になった。昼は働いて時間がないので、夜になつてから新潟の名医に薬をとりに行く。道すがらいつも七十歳ばかりの白髪の老女が出てきて話しかける。あるとき老女の家に連れて行かれて悪臭のする薬をもらった。そして、「来月二十八日、おまえに花嫁を与えよ

う。一族を招いて待つておれ」と不思議なことをいう。母はその薬で全快した。

その日、一族を集めて待つていると大風が吹いた。庭を見ると、美女が倒れている。家に抱きかかえて入れたが、息を吹き返し、「不思議な縁で命が助かったのだからお嫁になってもよい」という。たちまち結婚の宴となった。

この事件は近隣に広まった。柏崎の船頭が兵庫に行つて語つたのを、大坂の豪商、三輪屋久右衛門の番頭が耳にした。十六歳になる主人の娘ヲエツが、男山八幡宮で墨ノ倉清右衛門に嫁ぐ礼式をしているとき、大風にさらわれて飛び失せたのであった。三輪屋久右衛門は、弥左衛門とヲエツを大坂に呼び寄せ面会した。正式に結婚を許し大坂屋弥左衛門と名乗らせ、与板に返した。弥左衛門は隠居後、与板藩主に仕え、三輪比平と改名し、代々続いている。

弥左衛門が新渴に薬をとりに行く途中、出会つた老女こそ弥三郎婆である。大風を起こして、大坂からヲエツを連れてきたのである。弥左衛門（大坂屋。三輪比平）は弥三郎婆の神通力に感謝し、弥彦大明神の境内に社殿を建て、妙多羅天として祀つた。神として祀つてからは、人々を困らすことはなくなった。白い餅に小豆の煮物を添え、梅干しを置き、蓬の箸を備えて祀るべし。

一方、出羽国の置賜郡には、源義家や安部貞任の古城・陣所などの旧跡がたくさん残っている。屋代の一本柳には渡会弥三郎の屋敷跡があり、今は畑になっているが、神社が建っている。

### 本書（神社縁起）の作成と問題点

以上、ストーリーを見てくると、第四部がとりわけ大きく異なっていることがわかる。腕を切り落とされた



鬼女伝説を長々と語ってきたが、その後日譚として極めて短く書かれている。本書の主要なストーリーと関係が薄い。むしろ、とってつけたような印象を与える。

本書は「渡会弥三郎（ノ）先祖由来之事」から開始されている。安部一族（平家）は、奥州五十四郡と出羽国十二郡、併せて六十四郡の領主であった。仁義の道を守り、教養も高かった。その股肱の臣たる屋代郷の渡会一族（平家）もまた同様であった。

だが、永承六年（一〇五一）源頼義が鎮守府將軍として赴任したことから事件が起きる。安部頼良（頼時）の四男、保任に嫁入することが決まっていた錦木を奪った。これに怒った安部・渡会一族（平家）は頼義・義家（源家）に戦いを挑むが、敗北に終わった。渡会一族は復讐すべく再興をめざすが、その望みを背負って生き残った岩井戸姫（御前。もと天女）は、息子の弥三郎が武者修行に出ている間に、弥三郎の妻とその男子を病死させてしまう。岩井戸姫は責任を感じて狂気を発し、鬼女と変じた。そして、帰郷した弥三郎に腕を切り落とされてしまう。

ストーリーは、ごく自然に展開しているように見える。だが、大きな破綻がいくつもあって、見逃すことができない。その一つ、鬼女と化した弥三郎婆が心を改め、もと天女であるゆえの神通力を發揮して、村人に幸福をもたらしたので、妙多羅天として祀ったという。それならば、この天女を祀るのにふさわしいのは渡会一族の子孫ないし関係者であるべきだろう。遠く離れた与板の大坂屋弥左衛門こと三輪比平が神社を建立し祀ったと記すところに、もとの縁起を書き改めて本書を作成したことが見てとれる。

『屋代神社靈顯記』という書名であるのに、その中身は『弥彦妙多羅天縁起』あるいは『越後与板大坂屋由来記』へと変容している。『屋代神社靈顯記』は、本書の作成者が机上に置いて改編を試みた、もとの縁起の一つであろう。「目録」（翻刻参照）でいえば、それは弥三郎の登場する以前、義家が「三略六韜」を手に入れて安



部・渡会一族に勝利するまでが書いてあったと思われる。源義家が勝利して平和がよみがえったことを顕彰し、討ち滅ぼされた安部一族（平家）の霊を慰める、二つの意味を込めた縁起であつたろう。屋代郷では、義家を讃え、安部・渡会一族の霊魂を慰める神社と縁起が必要であつた。そのための神社も存在したのであろう。よつてもとの縁起は、再興をめざしたが空しく潰えた彼らの霊を慰めることを内胎していた。

本書の作成者は、新しい書名に替えたかつたのではなからうか。そのつもりで改編してみたが、もとの縁起に負うところが大きすぎ、本書作成の最大の目的である第四部をもとの縁起にうまく繋げられなくて、書名を変更できなかった。そう見るべきである。

もう一つ、本書において納得しがたいのは「弥三郎」という通称である。弥三郎の祖父は渡会弥太郎、平時宣、父は渡会弥太郎、平安宣であるから、その長男は「弥太郎」でなければならぬ。「弥三郎」と書けば三男とうけとられかねない。もとの縁起は「弥太郎」ではなかつたか。むりやり越後国弥彦の「弥三郎婆伝説」をくつつけたとしか考えられない。「弥三郎」なる人物を外からもつてきたのである。そもそも屋代郷には「弥三郎婆伝説」はなかつたと思われる。渡会一族の先祖を語り、その霊魂を讃えて慰める神社縁起に、それは必要ない。元服した「弥三郎」の名乗りがどこにも出てこないのは、元服前に父安宣が戦死したからである。もし正しく書くならば、渡会弥太郎□宣、でなければならぬ。

もとの『屋代神社霊顕記』を改編し、弥三郎の武者修行、弥三郎婆の鬼女変化、与板に住む弥左衛門の婚姻など、新たなモノガタリを創って付け加えたのであろうが、「弥太郎」を「弥三郎」と書いたのは納得しがたい。「旧臣ノ娘ヲ嫁シ（テ）妾婦ニナシ、一子ヲ産リ。弥三郎、二十歳ニナリシニ」は、見逃しがたい失錯である。

破綻は、もう一つある。越後国弥彦の妙多羅天、それを祀る大坂屋の由来を書くのが最終の目的だから、出

羽国屋代郷に住んでいる渡会弥三郎の話がいつまでも続いては困る。どこかで切り上げなければならなくなり、あつけなく死んだことにしてしまふ。鬼婆となった母親が弥彦へ飛び去ったあと、弥三郎は病氣にかかり百日もしないうちに死んだ、というのである。豪勇の誉れ高く、必勝をもたらす「三略六韜」を手に入れ、再興のための軍用金を蓄え、六十人あまりの残党を結集した英雄を語る縁起としては、あまりにあつけない死に方であり、そつけない書き方である。渡会弥太郎の靈魂を慰める縁起を改編して、新たな縁起を創ろうとしたからである。もとの縁起との繋ぎ目が大きくすぎて、うまく接合・調整されていない。無理な書き方になっている。

さらに指摘しておく。もとの縁起である『屋代神社靈蹟記』は、漢文で書かれていたかもしれない。本書のあちこちに、その痕跡と思われるレ点・返り点が見られる。あらたな縁起を書き起こすために、もとの漢文を訓読したのではなからうか。

本書には夥しいほどの朱筆による振り仮名がつけられている。そのしつこさは、なにゆえだろうか。読みやすくするためであろうが、そればかりとは思えない。本書は語り物の台本として作成されたのかもしれない。声を出して読むとき間違えないように、しつこいほど振り仮名をつけたのではなからうか。あるいは、書き流れ流布されることを願ってつけたのであろうか。もしかしたら、版木に彫って出版しようとしたのかもしれない。いずれにせよ、多くの人々に読んでもらおうとしたのであるが、それにしては仮名遣いが統一されていない。方言もかなり多く混じっている。やや中途半端なテキストになっていることは否めない。

注意すべきは、振り仮名がついていないところがあることだ。五十〜五十一丁にかけての一丁半がそうであるし、同じくへの付いた比較的短い文章と目次にもない。割り注もごく一部を除いてついていない。これらは、本書がやや複雑なプロセスを経て作成されたことを示唆する。作成者は、山形側の漢文縁起を読み下し、

新潟側の弥三郎婆伝説を付け加え、それをもとに想像の翼を羽ばたかせ、あらたなる縁起を創りあげて行ったと思われる。とりわけ、本書の終わりに近い与板の三輪屋の婚姻をものがたるストーリーは、この作成者の自由領域であつたに相違ない。

もとの資料として漢文の縁起があつたろうというのは、本文中に「四方峨々高山ソビイ」「残り之者」「不知」「御面談奉願」「奉再建」のごとき表記がいくつもあるからである。漢文を正しく読むなら、「四方二峨々タル高山聳エ」「残りノ者」と表記すべきであろう。ほかの二つは、一二点・返り点を直さなかつた例である。漢文表記がそのまま残つたものではなからうか。この程度のことから原資料が漢文表記の縁起であつたとは断言できないのであるが、一つの可能性として述べておこうと思う。また、振り仮名のついていないところは、作成者が書き加えた解説であろう。本文ではないので朱筆の振り仮名をつけなかつたと思われる。

本書は最終的に、山形側ではなく、新潟側の観点から作成されている。本文に米沢方言が見られるから作成者は新潟側に住む人物ではないだろう。米沢地方の人物と思われるが、広い地域をおおう壮大なモノガタリになっている。矛盾・破綻はあるものの、スリルに富み、おもしろく読める。なお、末尾の「神社」は高畠町一本柳にあつた屋代神社をさすと思われるが、「妙多羅天堂」といかなる関係があるのか、不明瞭な書き方になっている。

最後に、「補足資料」として、弥三郎伝説を記す江戸期の文書や昔話の類を五点、掲載した。

【付記】 全文を翻刻するにあたり、米沢市立米沢図書館の許可をいただいた。なお、翻刻の作業では、田村正彦氏（大東文化大学非常勤講師）の協力を得た。

【系図 1】

奥州一国の太守  
屋代・平潟城主  
安部大夫平頼良  
——  
渡会弥太郎平時宣  
(頼時と改名)

厨河左衛門の娘・萩野姫

渡会弥太郎平安宣  
(大内蔵)

【系図 2】

与板  
町人・弥左衛門

妻  
——  
弥左衛門 (幼名・比平)

(ママ)  
摂津国大坂  
——  
三輪屋久右衛門の娘  
(子孫)

岩井戸姫 (御前。天女)  
(弥三郎婆)

弥三郎

旧臣の娘

男子

凡 例

原文を正確に翻刻することに努めたが、印刷の都合上、以下のような処置を施した。

- 一、旧字体は新字体に直した。あきらかな誤字は現行の文字に改めた。
- 一、読みやすくするため句読点・濁点などを補い、割注を「」で囲んだ。
- 一、丁数の終わりを「」で示した。
- 一、内容に即して、適宜、段落をつけた。
- 一、へ印のついた文は、改行して二字下げにした。
- 一、漢字の右脇に振られた朱筆（ごく一部、墨筆あり）の振り仮名は、省略せず翻刻した。
- 一、漢字の右脇に振られた「く」は、「ヤウく」↓「ヤウヤウ」のように記した。
- 一、漢字の左脇に振られた文字は、漢字の下に（へ）をつけて翻刻した。
- 一、原文通りを示すときは、右脇に（ママ）をつけた。
- 一、「名高<sup>ナタカキ</sup>ヲ」「鎮守府將軍<sup>チンジュフ</sup>」のような振り仮名は、「名高<sup>ナタカ</sup>キヲ」「鎮守府ノ將軍<sup>チンジュフ</sup>」と表記した場合がある。
- 一、「遠矢<sup>トワヤ</sup>」「駿馬<sup>ジュンマ</sup>」のような振り仮名や方言は、そのまま翻刻した。
- 一、原文を正しい文字に直す場合は、右脇に（ ）つけて記した。
- 一、わかりやすくするため、（\*）の中に翻刻者の註を記した。
- 一、送り仮名の不足は、漢字の下に（ ）をつけて原文と同じくカタカナで補った。
- 一、文意の読解上、不足している文字を、本文に（ ）をつけて補った。
- 一、振り仮名および（ ）の中に記した文字にも、濁点をつけた。
- 一、ドモ（モ）、シテ（ノ）を示す漢字は、ドモ、シテ に直した。

一、「弥」「彌」、「エ」「エ」のような混用は、「弥」、「エ」に統一した。  
一、原文に漢字に振り仮名のつけられていない一丁半があるが、そのまま翻刻した。

### 屋代神社霊顕記

#### 目録

- 一 渡会弥三郎（ノ）先祖由来之事
- 一 弥三郎姥、出顕之事
- 一 源頼義公、御下向之事
- 一 源頼義公御父子（ト）安部家（ノ）合戦之事
- 一 八幡太郎義家公、三略六韜（ヲ）伝授シ玉フ事
- 一 源義家公、後三年（ノ）戦（ヒ）之事
- 一 巖（岩）井戸御前（ト）弥三郎、民間ニ落（ツ）ル事
- 一 弥三郎、武者修行之事
- 一 弥三郎、三略六韜ヲ得ル事
- 一 弥三郎母岩井戸、鬼女ト成（ル）事
- 一 白山大権現岳（ノ）跡之事

一 弥三郎、古郷エ戻ル事

一 弥三郎姥、与板（ノ）弥左衛門ニ女房ヲ授（ケ）ル事」

# 屋代神社靈顯記

## 渡会弥三郎（ノ）由来之事

天ノ白帝・赤帝、両輪ノ如キガ一度ハ盈、一度ハ缺、源平両家、時有（リ）テ興廢有（リ）。爰ニ、奥州一  
 国ノ大守、安部大夫頼良領ズ。今ハ奥羽（\*奥州⇨陸奥と出羽）ト二国ニ分レタレドモ、古往一国ニシテ、奥州  
 五十四郡・出羽十二郡ノ六十六郡ノ領主タリ。

其家臣ニ、渡会弥太郎平時宣トテ、置賜郡屋代郷ニテ五千貫ノ地ヲ領ジテ、平潟ノ城ニ居住ス。（今ハ一本  
 柳村ト云フナリ）。

安部大夫（ノ）股肱ノ臣タリ。其室ニ、厨河左衛門（ノ）娘萩野姫ヲ嫁ス。此腹ニ、一子ヲ産リ。懷妊シ  
 テ二十ヶ月ニシテ出生ノ男子有。其子、長ズルニ從テ力量、他ニ越、容ボウ美麗ニシテ、八歳ニシテ弓馬ニ達  
 シ、十五ニシテ和漢ノ書ニ博學タリ。

両親ノ寵愛、深カリケル。后ニハ主君ノ一方ノ将帥ヲモ主宰ベシト喜ビ、慈愛セリ。冠礼ヲトリ行（ハ）  
 ントテ、或ハ縁者ト云ヒ、殊ニ親キ中ナリ。英雄ヲアヤカラント、鳥海前司安頼ヲ烏帽子親トシテ、吉月吉辰  
 ヲ撰ミ、冠礼厚ク執行ヒ、渡会弥太郎平安宣ト改ム。家中ノ面々ニモ、御盃・御料理ヲ下サル。家老・用人・  
 物頭・平士ニ至ル迄、蓬萊島台、祿々ニ応ジ、善ヲ尽シ、美ヲツクシ、献上ス。

大守安部大夫頼良大君（ノ）屋形ニ参勤シ、拜領物・巻物・馬具、頂戴シ、則、家督（ヲ）仰付ラレ、



先例ノ通、行列正敷入部ス。此安宣、親ニ仕ル事、孝アリ。鶏初テ鳴テ起キ、行水シ、衣服ヲアラタメテ神仏ヲ拝シ、夜ノ明ルヲ待、両親ノ居殿ニ往キ、トノイノ者ニ安否ヲタツネ、食物ノ輕重ヲ問ヒ、好物ト不好トヲ悉ク尋ネ、寢所ニ至リ、眼ヲ覺サルヲ待、寒暑、腹」痛等モナカリシヤ。今日、召上ラレ度食物、無キカト、ナレ／＼シク奉レ問モシ、好モ（ノ）アレバ膳部所ヘ自身ニ差図シテ申付、父母ノ食シ給フヲ見、其後、我が殿ニ歸リ、食ニツク。一朝モ怠ル事ナシ。疾有時ハ、装束ヲトラズシテ、政務ノ間（マ）ニ幾度ト云（フ）事ナク見舞セリ。誠ニ孝アル者ハ忠有（リ）トイフ。力量、衆人ニ過タリ。

有時、城中ニ」時鐘アリ。度リ二尺五寸、厚サ三寸モアラン。親（ノ）病氣ニシテ、鐘ノ音（ガ）驢シト宣バ、自ら独リ往、ハツシテ置レタリ。家中ノ者、是ヲ見テ、更ニ人間ノ業ニハアラズ。是、天狗ノ仕業ナルベシ、ト沙汰シケリ。此事、若殿ヘ伺ヘケレバ、親（ノ）病氣（ノ）快氣迄ハ、暫時ノ内、時鐘（ヲ）休ムベシ、トアリ。主命ナレバ其通りニシテ差置ケリ。

大慶時宣（\*安宣の父）、数日ヲ移ズ」医術、漸々功有テ、瘥快シケレバ、床揚ノ祝儀トシテ、老臣・物頭・諸士ニ御酒下サレタリ。

其時、岩瀬角之進ト云（フ）物頭（ノ）言上シケルハ、時鐘モ数日指留ニ相成、氣ノ毒ニ奉レ存ジ候。今日釣セ、元ノ通り時ヲ打テ可レ然旨申上ケレバ、若殿（\*安宣）十七歳、弥太郎（\*安宣が）其鐘、一見スベキ間、近習ノ者供、可レ仕ト鐘堂ニ行テ、鐘ノ龍頭ヲ右ノ手ニ提起シ、左ノ手ヲ入（レ）テ、少シ手伝セヨト、近習ノ者五人シテ、片々ヲ揚ゴト云（ヘ）ドモ、漸ク少シ離レタルヲ、（\*安宣は）両手ニテ元ノ如ク掛タリ。此時始メテ、家中ノ人々、無双ノ強力ナル事ヲ知ル。乱世ノ時ハ、一方ノ主将ト成給ント感称ス。大殿（\*時宣）モ喜悅浅カラズ。家ノ興ルベキセン兵ナリ、ト祝儀猶々興ヲ増シケリ。

是ヨリシテ、弥太郎（ニ \*安宣に）社稷ヲ譲リ、国政ヲ行ハセ、大守（\*頼良）江隠居」ノ願ヲ立シニ、

弥太郎（\*安宣）ガ英雄ヲ聞召、早速、願ノ通り相叶ヒ、弥太郎ヲ渡会大内蔵平安宣ト厳命アリ。国政ヲ司ト  
ラシム。

孝ハ百行ノ本ナリト云（ヒ）シニ違ズ、忠有ノ者ニハ禄ヲ重シ、其家ヲニギワシ、佞人ヲ遠ケ、百姓ニハ年貢  
ヲ減ジ、賞ヲ重クシ、罪ヲ輕ジ、軍役ヲツカワス。農業ノ時ヲ費サズ、貧乏ヲ恵ミ、老タルヲ育ニ、九十ヨリ  
以<sup>（マ）</sup>上ハ粟二石宛ヲ与ヒ、二子・三子ヲ賞シ、百姓扱フ役人ハ清廉ノ人ヲ様シ見テ、賄賂ヲ貪ル者、或ハ上ノ  
威<sup>（イ）</sup>カカツテ下民ヲシカリ罵リ、權威ヲ暴ジ、民ヲ芥ノ如クニ思ヒ、百姓ニ怒リヲ起サセル者、上ニ向テハ言葉  
ヲ飾リ、コビヘツラヒ、忠ト見セテ、己ガ産業ニ加増ヲ求メ、禄ヲ貪リ、下々ノ金銀ヲセフリトリ、私慾深キ  
者ヲ退ケ遠ケ、隠シ目附ヲ出シ、其行式ヲ聞出シ、賞罰明ラカニシテ、清直ノ士ヲ撰ミ扱ハセケル程ニ、農民  
（ハ）赤子ノ如ク和ギ睦テ、国主ヲ尊敬スル事、天地ノ如シ。父母ノ如クニ慕テ、弑虐ノ罪人不起。五穀ヨク  
実ノリ、貢物ヲ進ミアゲン事ヲ願フ。風雨和順シ、誠ニ静謐ニ鎮定リケリ。

斯テ星霜押シウツリ、金烏玉兔遅々アラザレバ、大内蔵（\*安宣）二十一歳ニゾナラレケレドモ、定マレル  
妻トテハナカリケル。時ニ大殿ノ時宣ハ、五月中旬ヨリ不例ニシテ、初ハ風邪ノ熱ノ様ニシテ、病ノ床ニ伏シ  
給ヒ、次第ニ病氣重リ、医術ノ者、家中ノ典薬頭、引（キ）モキラズ、門前ニ市ヲナシテ、薬方ヲ論ジ、術ヲ  
替ヒ、療治スルトイヘドモ、次第ニ病重リ、屋代郷ノ総社ナレバ、大屋代ニ御代参有（リ）テ、別当・神主・  
社僧、疾病平愈ノ命乞ノ祈禱一七日、誠祈ヲ抽ジ、丹誠ヲ尽ストイヘドモ、其驗シモ更ニナシ。

枕元ニ大内蔵ヲ呼、是、汝ガ心ヲツクシ（テノ）取扱ヒ、誠ニ他ニ過タリ。シカシナガラ医業曾テ験ナシ。  
今度ハ黄泉ノ客タルベシ。又、国政ニ心ヲ用ヒラレバ、国家モ豊ニ治リ社稷（ハ）危キ事コレナシ。此儀ニ於  
テハ、思ヒ置事更ニナシ。乍レ去、其許ノ力量ハ他ニ勝レシ英雄ナリ。是ニ付（ケ）テモ能キ姫ヲ娶リ（テ）  
添セタク思ヒシニ、未見当ラズ。コレ斗リ氣ノ障リナリ。又、主君（\*安部頼良）ヲバ大事（ニ）スベシ。

夫、主君ハ日月ノ如ク敬ヒ、忠勤怠ル事ナカレ。太平ニ居テ乱ヲ忘レズ。モシ乱軍寄来ル時ハ、二心ヲサシハサマズ、三軍一ツ心ヲマトメ、謀士ノ諫言ヲ用ヒ、勇者ニハ心ヲ進メ、智者ニハ其心ヲ立、愚者ニハ其死ヲ憐レミ、我ガ英雄ヲ顕ハサズ、諸将ノ功ヲアラワセ。国ヲサツテハ家ヲ忘レ、戦ニ臨ンデハ其身ヲ忘レ、忠ニ命ヲツクシ、名ヲ後代ニ残シ、骸ヲ山野ニ捨ルハ、武士ノ好ム所ナリ。君ハ君タラズトモ、臣ハ臣ノ道ヲ守ラザルハ、士ノ道ニアラズ。

遺言モ可レ有ナレドモ、病苦ニセマリ、誠ノ言ニアラザルモノナレバ口ヲ閉ルト教訓シ、其翌日、四月廿八日、眠ガ如ク死去ス。

安宣ト萩ノ御前（ハ）悲歎ノ涙ダ」セキアイズ、絶入計リニ泣沈ム。目モアテラレヌ有様ナリ。老臣・物頭・諸士ニ至ル迄、愁悲ノ程、云（フ）計リナシ。斯テモ可レ有ニアラザレバ、領地ヘ禁断ノ触（ヲ）流シケレバ、老タルモ稚モ、徳ヲ慕ヒテ、カナシマザルハナシ。城ノ内ニハ仮殿ヲシツラヒ、遺骸ヲ納メ、萩ノ方ト安宣ハ、五日絶食ニテ、ワラコモノ上ニシテ、石ノ枕ニ帯トカズ通夜シ、葬送ノ礼式、重ク執行ヒ、宗廟ニ送ラレ△清涼院忠解脱良大居士ト号ス。

### 弥三郎姥、出現之事

夫ヨリ三年ノ間、酒・鱈ヲ用ヒズ、弦歌ヲ断ジ、何トナク館舎、モノ寂シク成ニケリ。三年ノ喪モ明スレバ、近習・用人ノ衆、殿（\*安信）ノ氣ヲウツ散セント、野合・狩野ヲ進メケレドモ、出野シ玉ハズ。

或時、安宣、夢見ラレシニ、猫ノ大ヒナルニ、首ニ明玉ヲ戴キ、東ノ山ヨリ飛来リ、座下ニ蹲リ、四方ヲ白眼ム。眼ク、スサマジク見テ夢覺ヌ。

不思議ナル夢ナリ。吉凶、如何ニヤト思慮シ、家来ノ士ニ安達仙伯ト云（フ）医師、天文・地利ヲ曉シ、周易ニモ達シタル者アリ。則、召寄ケルニ、早速登城シケルニ仍テ、昨夜、ケ様々々ノ夢ヲ見ル。吉凶、何ヲ司ト

ルヤ、考<sup>カン</sup>ヘケレヨ、ト問<sup>ト</sup>ワレケレバ、仙伯<sup>センハク</sup>、謹<sup>キン</sup>(シ)デ笠<sup>メ</sup>ヲトリ、十八遍<sup>ハチジュウハチ</sup>ノ(\*ヲ)取<sup>トリ</sup>テ、老陽<sup>ラウヤウ</sup>・老陰<sup>ラウイン</sup>・少陽<sup>シャウヤウ</sup>・少陰<sup>シャウイン</sup>ノ四象<sup>シシヤウ</sup>ヲ分<sup>ワ</sup>ケテ、暫<sup>シバ</sup>ク考<sup>サテ</sup>ヘシガ、扱<sup>サツ</sup>、不思議<sup>フシギ</sup>ノ夢<sup>ユメ</sup>ナリ。乾<sup>ケン</sup>爲<sup>キ</sup>天<sup>テン</sup>ノ卦<sup>クワ</sup>ナリ。

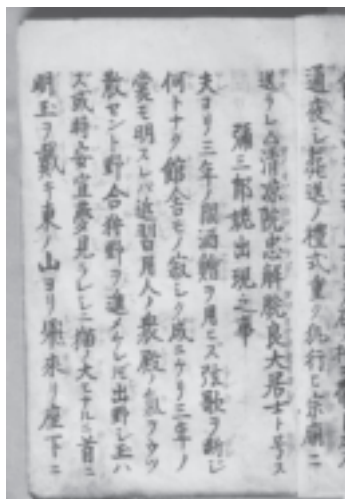
古往<sup>コウカミ</sup>、唐土<sup>モロコシ</sup>ノ周朝<sup>シウテフ</sup>ノ史編<sup>シヒン</sup>、トテ子牙<sup>シガ</sup>ヲ得<sup>エ</sup>、編<sup>ヘン</sup>ガ祖禹<sup>ソウ</sup>ノ爲<sup>タメ</sup>ニ占<sup>ウラナフ</sup>テ、皐陶<sup>コウトウ</sup>ヲ得<sup>エ</sup>タリ。六龍<sup>リクリウ</sup>、天<sup>テン</sup>ニ登<sup>ノボ</sup>ラントスレドモ、上<sup>カミ</sup>ノ龍<sup>リウ</sup>ニ支<sup>サ</sup>(\*障<sup>ヘ</sup>)ヒラレテ登<sup>ノボ</sup>ル事<sup>コト</sup>エザルナリ。猫<sup>ネコ</sup>ハ鼠賊<sup>ソゾク</sup>ヲ平<sup>タイラ</sup>グ物<sup>モノ</sup>ニシテ陰<sup>イン</sup>ナリ。隠<sup>カク</sup>レタル者<sup>モノ</sup>ヲ平治<sup>ヘイヂ</sup>セン。

何<sup>ナニ</sup>ニモセヨ、東山<sup>カミ</sup>ニ狩<sup>カ</sup>ヲシ(テ)見<sup>ミ</sup>玉<sup>ヒ</sup>ビ、ト云<sup>イフ</sup>(フ)。清淨<sup>シユウジヤウ</sup>ニ身<sup>ミ</sup>ヲキヨメ、出野<sup>シユツアル</sup>有<sup>アル</sup>ベシ、ト云<sup>イフ</sup>(フ)。

頃<sup>コロ</sup>シモ三月三日、桃花<sup>タウカ</sup>曲<sup>カキユク</sup>水<sup>スイ</sup>ノ宴<sup>エン</sup>ニシテ觴<sup>サカヅキ</sup>ヲ流<sup>ナガ</sup>サント供<sup>トモ</sup>人<sup>ヒト</sup>數<sup>スウ</sup>多<sup>タ</sup>召<sup>マダシ</sup>連<sup>ツレ</sup>、狩野<sup>カノノ</sup>ノ裝束<sup>ヤスノブ</sup>ハ安宣<sup>ヤスノブ</sup>馬上<sup>バシヤウ</sup>ニテ乗替<sup>ノリカヘ</sup>ノ駕籠<sup>カゴ</sup>一挺<sup>イチテイ</sup>、銀<sup>ギン</sup>ノ茶瓶<sup>チャビン</sup>・狹箱<sup>ハサハコ</sup>・花見<sup>ハナミ</sup>ノ行粧<sup>ギヤウウ</sup>東<sup>カミ</sup>ニテ、弓矢<sup>キウヤ</sup>・甲冑<sup>カウ</sup>・鎗<sup>ヤリ</sup>モナシ。不<sup>フ</sup>シニ思<sup>オモ</sup>フモ斷<sup>コトハ</sup>リナリ。東<sup>カミ</sup>ニ岩井<sup>イワキ</sup>戸<sup>ド</sup>ト云<sup>イフ</sup>(フ)高山<sup>カミ</sup>アリ。辰<sup>チン</sup>己<sup>キ</sup>ハ伊達<sup>イダツ</sup>郡<sup>グン</sup>、丑寅<sup>セウイン</sup>ハ仙台<sup>センタイ</sup>・刈田<sup>カッタ</sup>郡<sup>グン</sup>、西<sup>サイ</sup>ハ置賜<sup>ウキタミ</sup>郡<sup>グン</sup>。三郡<sup>サングン</sup>ニ伏<sup>フシ</sup>テ絶頂<sup>ゼツテイ</sup>ニ猫鼻<sup>ネコハナ</sup>トイフ岩<sup>イワ</sup>、百尋<sup>ヒヤクジン</sup>ニ除<sup>ス</sup>ル。上<sup>ウエ</sup>ハ平<sup>ヘイ</sup>ニシテ百筵<sup>ヒヤクセン</sup>ヲ敷<sup>シキ</sup>竝<sup>ナラ</sup>ブベキ寝<sup>ネ</sup>タタル大山<sup>ダイサン</sup>也。雲霞<sup>ウンカ</sup>ノ峯<sup>ミネ</sup>ヲ離<sup>ハナ</sup>ル、事<sup>コト</sup>ナシ。

此日<sup>コノヒ</sup>ハ快晴<sup>クワイセイ</sup>ニシテ風霞<sup>フウカ</sup>モナシ。禁<sup>フモト</sup>ハ桜<sup>サクラ</sup>ノ花<sup>ハナ</sup>半開<sup>ハンカイ</sup>ニシテ、日面<sup>ヒメツ</sup>ハ爛熳<sup>ランマン</sup>煖<sup>ナン</sup>ト咲乱<sup>サキミダ</sup>レ、アタカモ吉野<sup>キチノ</sup>・初瀬<sup>ハツセ</sup>ノ風景<sup>フウケイ</sup>ニ等<sup>ヒト</sup>シク、禁<sup>フモト</sup>ヨリ一里<sup>ヒト</sup>程<sup>ホド</sup>モ行<sup>ユキ</sup>シカバ、簫笛<sup>シヤウテキ</sup>・琴<sup>コト</sup>ノ音聞<sup>ネキコ</sup>ヘケレバ、早<sup>ハヤ</sup>クモ郷人<sup>サトビト</sup>ハ時<sup>トキ</sup>ヲ知<sup>チ</sup>リ、花見<sup>ハナミ</sup>ニ来<sup>キタ</sup>ル者<sup>モノ</sup>ナラント猶々<sup>ナナナラフ</sup>與<sup>フミ</sup>エ踏<sup>フミ</sup>入<sup>フミ</sup>リシカバ、溪<sup>タニ</sup>ニハアラデ、峯<sup>ミネ</sup>ニ音<sup>ヲ</sup>ス(ル)ヤウニ二聞<sup>キコ</sup>ヘケレバ、若侍<sup>ワカザムライ</sup>ハ木<sup>キ</sup>ノ根<sup>ネ</sup>・萱<sup>カヤ</sup>ノ根押<sup>ネヨシウケ</sup>分<sup>フ</sup>テ、岩井<sup>イワキ</sup>戸<sup>ド</sup>ノ頂上<sup>テイジョウ</sup>ノ二登<sup>ノボ</sup>リ、龍<sup>ケン</sup>ノ劍<sup>ケン</sup>ニテホリシト云<sup>イフ</sup>(フ)池<sup>イケ</sup>アリ。何程<sup>ナニホド</sup>ノ早天<sup>サテン</sup>ニモ干<sup>ヒ</sup>ル事<sup>コト</sup>ナシト云<sup>イフ</sup>(フ)池<sup>イケ</sup>ナリト申<sup>モウ</sup>ス。夫<sup>ソレ</sup>ヨリ西<sup>サイ</sup>ニ當<sup>アツ</sup>テ、四五町<sup>ヘタ</sup>モ隔<sup>ヘ</sup>リ、猫鼻<sup>ネコハナ</sup>ノ岩<sup>イワ</sup>ノ上<sup>ウエ</sup>ニ紅<sup>ベニ</sup>ノ色<sup>イロ</sup>(ノ)羅綾<sup>ラリヤウ</sup>ノ袂<sup>タモト</sup>・錦<sup>ニシキ</sup>ノ十二<sup>ヒトエ</sup>重<sup>ヒ</sup>、花<sup>ハナ</sup>ノ弁<sup>ハナ</sup>ヲサシ、數十<sup>カウジン</sup>人<sup>ヒト</sup>ノ婦人<sup>フニン</sup>、樂<sup>ガク</sup>ヲ奏<sup>ソウ</sup>シテ居<sup>イ</sup>タリケリ。

往昔<sup>ムカシ</sup>、唐土<sup>モロコシ</sup>ノ人<sup>ヒト</sup>、仙家<sup>センカ</sup>ニ入<sup>カ</sup>(リ)テ西王母<sup>サイワウボ</sup>ニ見<sup>ミ</sup>ヘ、纓<sup>フツ</sup>カ半日<sup>ハンニツ</sup>ノ客<sup>カク</sup>タリト雖<sup>イヘド</sup>モ、七世<sup>シチセ</sup>ノ孫<sup>ソン</sup>ニ逢<sup>アイ</sup>シモ斯<sup>カ</sup>ヤト思<sup>オモ</sup>ハレ、暫<sup>シバ</sup>シアキ



レテ居タリシガ、假令<sup>タトヘ</sup>、化生<sup>ケシヤウ</sup>ノ物ニモセヨ、実否<sup>ジツフ</sup>、明<sup>ミ</sup>(ラカ)ニ見トゞケズンバ、臆<sup>ヲク</sup>シタルニ似<sup>ニ</sup>タリ。武<sup>フ</sup>ノ道<sup>ミチ</sup>ニアラズト皆々<sup>ミナミナトモ</sup>供<sup>モ</sup>(ヲ)セヨ、ト真<sup>マツサキ</sup>先<sup>ハシ</sup>ニ走り出<sup>イダ</sup>スニ、俄<sup>ニカサワガシ</sup>ニ駭<sup>イデ</sup>キ躰<sup>テイ</sup>ニナリシガ、一人二人、天<sup>テン</sup>ニ飛<sup>ト</sup>ト見ヘシガ、霞<sup>カスミ</sup>ニ隠<sup>カク</sup>レテ行<sup>ユキカタ</sup>方<sup>ナラナ</sup>ナシ。猶々<sup>ナラナ</sup>、化生<sup>ケシヤウ</sup>ノ業<sup>ワザ</sup>ナリト猫鼻<sup>ネコハナ</sup>ノ岩<sup>イワ</sup>ニ至<sup>イタ</sup>レバ、只<sup>タゞ</sup>一人ノ女性<sup>コトメ</sup>、琴<sup>コト</sup>一面<sup>イデ</sup>前<sup>マエ</sup>ニシテ、涙<sup>ナミダ</sup>ナ」ガラニシホくトシテ居タリ。

其姿<sup>スズタ</sup>ニ八<sup>ハチ</sup>(※十六歳)計<sup>バカ</sup>リト見<sup>ミ</sup>ヘ、容顔<sup>ヨウガン</sup>美麗<sup>ビレイ</sup>ニシテ、芙蓉<sup>フヨウ</sup>ノ眼<sup>マナ</sup>チリ、丹花<sup>タンクワ</sup>ノクチビル、十二<sup>ジュニ</sup>重<sup>キ</sup>ヲ著<sup>ナ</sup>、何<sup>ナニ</sup>トモ名<sup>ナ</sup>モ知<sup>チ</sup>レズ(※ヌ)衣<sup>コロモ</sup>ナリ。唐織<sup>カラオリ</sup>ノ物<sup>モノ</sup>ト見<sup>ミ</sup>ヘテ、首<sup>カシラ</sup>ノ飴<sup>カザリ</sup>ハ、金<sup>カン</sup>・銀<sup>ギン</sup>・玉<sup>タマ</sup>ノ簪<sup>ザン</sup>ナリ。揚貴<sup>ヤウキ</sup>妃<sup>ヒ</sup>・西施<sup>セイシ</sup>モ面<sup>オモテ</sup>ヲ恥<sup>ハ</sup>ツベキ程<sup>ホド</sup>ノ美女<sup>ビニヨ</sup>・傾国<sup>ケイコク</sup>ノ姿<sup>スガタ</sup>アリ。天人<sup>テンニン</sup>ト云<sup>イフ</sup>(フ)者<sup>モノ</sup>ニモアルカ。又ハ化生<sup>ケセウ</sup>ノ者<sup>モノ</sup>ハ違<sup>タガ</sup>ヒナシト見<sup>ミ</sup>テ、汝<sup>ナニ</sup>、何<sup>ナニ</sup>者<sup>モノ</sup>ナレバ、先<sup>サキ</sup>ニハ數十人<sup>サウジウ</sup>ニ見ヘシガ」独<sup>ヒト</sup>リ残<sup>ノコ</sup>レリ、ト荒<sup>アラ</sup>ケク尋<sup>タツ</sup>不<sup>フ</sup>問<sup>モン</sup>ニ、此女<sup>コノメイ</sup>、答<sup>コタヘ</sup>テ曰<sup>イハク</sup>、我<sup>セキ</sup>ハ赤帝<sup>セキテイ</sup>ノ兒<sup>ミコ</sup>ナリ。下界<sup>ゲカイ</sup>ニ下<sup>ゲ</sup>サル待<sup>マテ</sup>女<sup>メ</sup>(ガ)天<sup>アマ</sup>ノ羽衣<sup>ハゴロモ</sup>ヲ持<sup>モチ</sup>帰<sup>カイ</sup>ル。予<sup>コト</sup>ハ天<sup>アマ</sup>ニ登<sup>ノボ</sup>ル事<sup>コト</sup>叶<sup>カナ</sup>ハズ、夫故<sup>ソレ</sup>ニ歎<sup>ナゲ</sup>クナリト云<sup>イフ</sup>(フ)。

大勇<sup>ダイユウ</sup>ノ大内藏<sup>ダイナツゼン</sup>ナレバ、空腹<sup>クウフク</sup>ニナリシ(ニ)、弁当<sup>ベンドウ</sup>開<sup>ヒラ</sup>ケ、ト從士<sup>ジュウシ</sup>ニ申<sup>マウ</sup>付<sup>ツ</sup>レバ、毛氈<sup>モフセン</sup>ノ(※ヲ)敷<sup>シキ</sup>並<sup>ナラ</sup>ベ、酒<sup>サケ</sup>ヲ吞<sup>ノミ</sup>汝<sup>モテ</sup>、持<sup>モチ</sup>シ(※タル)琴<sup>コト</sup>ヲ調<sup>シラ</sup>べヨ。肴<sup>サカナ</sup>ニセント云<sup>イフ</sup>(フ)。女<sup>メ</sup>、琴<sup>コト</sup>(ヲ)カキヨセテ、泣<sup>ナクナク</sup>々々、奏婦<sup>ソウフ</sup>恋<sup>コイ</sup>ノ曲<sup>キョク</sup>ヲ彈<sup>ハ</sup>タリ。爪音<sup>ツマヲト</sup>ノヤサシサ、音声<sup>オンセイ</sup>ノスゞシサ、云<sup>イフ</sup>(フ)バカリナシ。

此時<sup>コトキ</sup>、安達<sup>アタツゼン</sup>仙伯<sup>センハク</sup>ガ夢<sup>ユメ</sup>ノ占<sup>ウラナ</sup>ヒ、得<sup>エ</sup>物<sup>モノ</sup>アラント云<sup>イフ</sup>(ヒ)シヲ思<sup>オモ</sup>ヒ付<sup>ツ</sup>(キ)タリ。汝<sup>ナニ</sup>、奏婦<sup>ソウフ</sup>恋<sup>コイ</sup>ノ曲<sup>キョク</sup>ヲ調<sup>シラ</sup>タリ。其音<sup>オン</sup>声<sup>セイ</sup>ニ、夫<sup>ソノ</sup>ヲ慕<sup>モト</sup>ノ心<sup>ココロ</sup>アリ。宿<sup>ヤド</sup>ノ妻<sup>メツメ</sup>ト定<sup>サダ</sup>メシ(※タル)者<sup>モノ</sup>ナシ。予<sup>レ</sup>ニ隨<sup>シタ</sup>ガヘルヤ、ト云<sup>イフ</sup>(ヘ)バ、女<sup>メ</sup>、答<sup>コタヘ</sup>テ云<sup>イフ</sup>(ハク)。(※タル)既<sup>スデ</sup>ニ小<sup>コ</sup>子<sup>シ</sup>、下界<sup>ゲカイ</sup>ニ下<sup>ゲ</sup>サレ、天<sup>アマ</sup>ノ羽衣<sup>ハゴロモ</sup>ヲ許<sup>ユル</sup>サレズ。天上<sup>カミ</sup>叶<sup>カナ</sup>ヒガタシ。御身<sup>オンミ</sup>ニ從<sup>シタ</sup>ヒ參<sup>マシ</sup>ラセント云<sup>イフ</sup>(フ)。禁<sup>フモト</sup>ノ小<sup>コ</sup>途<sup>ミチ</sup>迄<sup>マデ</sup>、從士<sup>ジュウシ</sup>ニ負<sup>ヲ</sup>セ、逸<sup>イツ</sup>足<sup>ソク</sup>ヲ出<sup>イデ</sup>シテ馬<sup>ウマ</sup>ノ立場<sup>タテバ</sup>迄<sup>マデ</sup>下<sup>ゲ</sup>リシカ」バ、日<sup>ヒ</sup>モ西山<sup>ニシサン</sup>ニ傾<sup>カクム</sup>キケレバ、婦館<sup>フキン</sup>セント婦人<sup>フジン</sup>ハ乗替<sup>ノリカヘ</sup>ヲ駕籠<sup>カゴ</sup>ニノセ、其身<sup>カミ</sup>ハ狩馬<sup>カリバ</sup>ニマタガリ、桜<sup>サクラ</sup>ノ花<sup>ハナ</sup>ヲ萩野<sup>ハギノ</sup>御前<sup>ゴゼン</sup>ヘイエヅトニセント両掛<sup>リヤウカケ</sup>ニサシ、行<sup>ユク</sup>烈<sup>レツ</sup>正<sup>セイ</sup>シク飯館<sup>イハン</sup>セリ。

大内藏<sup>ダイナツゼン</sup>ハ、母公萩野<sup>ハギノ</sup>御前<sup>ゴゼン</sup>ノ奥御殿<sup>ウクゴテン</sup>ニ爲<sup>イラ</sup>スラレ、夢<sup>ユメ</sup>ノ告<sup>ツゲ</sup>ニ仍<sup>ヨツ</sup>テ狩野<sup>カリノ</sup>ニ出<sup>イデ</sup>テ、婦人<sup>フジン</sup>ヲ得<sup>エ</sup>、連飯<sup>レンイハ</sup>リシ事<sup>コト</sup>共<sup>ニ</sup>、残<sup>マドモ</sup>ズ演舌<sup>エンゼツ</sup>致<sup>イダ</sup>サレシニ、母御前<sup>ハハノゴゼン</sup>、暫<sup>シバ</sup>シ思案<sup>シアン</sup>ノ躰<sup>テイ</sup>ナリシガ、良<sup>ヤ</sup>有<sup>アツ</sup>テ宣<sup>ノミ</sup>ヘケルハ、其婦人<sup>メノメ</sup>「我殿<sup>オノテン</sup>ニ入<sup>イ</sup>(レ)ルベシ。寢食<sup>シンシヨク</sup>ヲ一

ツニシテ、其行穆ヲ心見ルベシ、ト有（リ）ケレバ、駕籠ヲ奥御殿へカキ入レケリ。

則、御前、面談シ玉ヘテ、慈愛ノ詞ヲカケラレケレバ、婦女、愚昧ノ少子（ニ）宮仕ユル喜悦ノ

幸ヒナラン事ヲ答ニ、其容儀ヲ見ルニ、誠ニ天人ニハ違ヒナシト見ヘタリ。日毎々々ニ琴ヲ弾セ、楽器ヲ授テ

試ルニ、甚ダ妙手アリ。是、天ノ我家ニ授ケ玉フナリト祝ビ、家老ノ面々ニモ御沙汰アリ。新ニ奥御殿（ヲ）

建ラレ、四月八日、婚姻ノ礼式執行ハレ、岩井戸御前ト改メ、興入セラレタリ。

家中ノ諸士、萬歳ヲ奉（リ）祝（シ）。是ヨリ海老同穴ノカタラヒヲナシ、寵愛不レ浅、連リ比翼ノチギリ

睦ビケリ。程ナク懷妊ニナリ、此腹ニ誕生シタルヲ、弥三郎ト号ス。民間ニ落隠レシハ、是ナリ。」

# 源頼義公、御下向之事

永承六辛卯（二〇五一）、摂津守頼義公、鎮守府ノ將軍ニ任ゼラレ、奥州ニ御下向アリ。因慈、安部大夫平

頼良、奥州ノ主領タルニ仍テ、街道掃除、橋々ノ掛替、國中（ニ）嚴重ニ触レ渡シ、新ニ城郭ヲ築キ、新御殿

ヲ建、玉ノイラカラ並べ、御座ノ間ハ唐木ヲ用ヒ、善ヲツクシ、美ヲツクセリ。

某身ノ実名（\*安部大夫平頼良）ト鎮守府將軍御実名（ハ \*源頼義）、文字ハ違ヒ共、訓声ハ同ジ。依レ之、

恐れ敬ノ心ヲ以テ改名シテ、是ヨリ安部大夫平頼時ト号シテ、誠謹ニシテ仕奉リシニ、世子ニ貞任・宗任・

直任・保任・守任、五人ヲ初トシテ、数多ノ子アリト雖モ、宿老・長臣ノ中ニ男子ナケレバ、臣下ニクダシテ

名跡ニ備ヒケリ。保任、厨河ノ左右衛門ニ男子ナキヲ以テ継子ニ下ス。厨河四郎保任ト号ス。衣ノ館ノ城主、

是ナリ。衣ノ館（ヨリ）一里ヲヘタデズ、七ツ城アリ。今、其古跡・堀ハ田地トナリ、郭内ハ畑トナリタレド

モ、廓頭タリ。

爰ニ、津輕・青森ニ宇堂左馬之佐安方ト号ス一城ノ地頭ナ（\*ア）リ。此娘ニ、錦木ト言、奥州一國ニ並ビ

ナキ美女アリ。王照君・小野小町ニモ不恥程ノ娘ナリ。是ヲ、安部大夫（\*平頼時）、嫡子貞任ガ妻ニ約定シテ



置タリ。」未ダ歳若ニシテ興入レハナカリケレドモ、陸奥一國ノ主領ノ嫁婦ト定メシ事ナレバ、貴・賤共ニ美女ノ名高キヲ知ラザル者ハナカリケリ。源ノ頼義、此美名ヲ聞召、無理ニ呼迎ヒテ、寵愛セラレタリ。

此時、安部大夫平頼時（\*改名前は平頼良、大（イ）ニ怒リ、如何ニ鎮守府將軍（\*源頼義）ナレバトテ、貞任ニ約シ置（キ）タル事ヲ知りナガラ、無道ノ仕方、奇怪ナリ。天下ノ政道ヲ司ドル身トゾ」權威ニ誇リ、色ヲ好ミ、礼義ヲ乱ス。是、暴虐ナリ。何ンスレゾ、予、膝ヲ屈センヤ、ト大ヒニ憤リ、是ヨリ台命ニ応ゼズ。参勤式日ノ礼ヲ止メ、門葉ノ人々・老臣・幕下・城主ノ大名・小名ヲ召寄、軍評定ノ外、他事ナシ。一朝ノ怒リ、其身ヲ亡スト云フ事、斯ノ事ヲヤ云（フ）ベキ也。実ニ謹シムベキ事ナリ。

### 源頼義父子（ト）合戦之事

是ヨリ呉越ノ隔ヲナシ、安部大夫平頼時、今ハ出羽置賜郡太荒沢嶽ノ北ニ當ツテ、四方ニ寇々（タル）高山ソビイ、前二大河有（リ）テ、屋城ト云（フ）。ヤウガイ堅固ノ城也。此所ニ楯籠ル源ノ頼義公、高峯アラウト云（フ）所ニ対陳シ、命令ニ不レ随ノ罪ヲ糺ント合戦トナリヌ。龍虎ノ争ヒ九ケ年ノ間、干戈ノ止ム隙ハナカリシニ、其時、渡会大内蔵、抜群ノ高名」アリ。

既ニ八幡太郎義家、安部貞任ト戦場ニ矢ヲ射ツクシ、名乗ノ一本矢残りタリ。是ヲモ射払ハントセシドモ、加茂次郎次義、コレヲ諫メテ申（シ）ケルハ、譬、軍ニ勝タリドモ矢種ヲ射ツクシテハ後代迄ノ恥辱也ト止メケレバ、シヅ／＼ト落ラレケルニ、貞任、散々ニ射リ掛ケレバ、敵味方、矢中ニテ組合、河ノ中ニ落ケルトナリ。（今ニ此淵ヲ矢淵ト云也）。

高峯ニアル貞任、追フ事」急ニシテ遁ルベキ所ナク、ノデノ木（\*白膠木）ノ大木アリ。我（ヲ）隠シ（テ）クレヨ、ト誓ヒ玉ヘバ、ノデノ大木ニツニ割レ、中（ハ）ウツロナリケレバ、其中ニ弓杖ツギ入（レ）給ヒシニ、又元ノ如クワレケイケレバ、日モ西山ニ没シ、其日ノ難ヲノガレ玉ヘシ故、此所ヲ嬉シガ沢ト云（フ）。ノ



デノ木ヲ、軍ニ勝ノ心ヲ取テ、今ハカツノ木ト云（フ）。勝軍木ト是ヨリ初テ名付ルトナリ。

然レドモ、源家ノ運ヤ強カリケン、安部大夫平頼時、流矢ニ当テ其疵不レ癒。天喜五丁酉年九月五日、遂ニ死去シ玉ヘヌ。宗任ヲ囚人ニシテ、三軍ヲマトメテ、鎮守府ノ將軍（＊源頼義）、上洛ナサレタリ。禁庭ニテ雲上方ハ、奥ノ夷狄ナレバ人間ニアザルヤウニ思ハレ、梅ノ花ヲ問（ヒ）玉フニ、貞任、即興ニ、

我国ノ梅ノ花トハ見ツレドモ

大宮人ハナニトイフラン」

ト詠ジケルトナン。田舎武士デモ和哥ノ道ハ嗜ムベキ事ナリ。後代ニ名ヲ残スハ、歌ノ徳ナリ。

### 八幡太郎源義家公、三略六韜（ヨ）伝授シ玉フ事

往昔、源ノ頼義公ニ世子未ダ出生ナキ事ヲ歎キ、鳩ノ峯男山八幡宮江深ク立願有（リ）シニ、感應空シカラズシテ、男子誕生ス。御諱ヲ八幡宮ノ申子ナレバ迎、八幡太郎ト号ス。後三年ノ大将義家公、是ナリ。

大江ノ師房卿、大内ノ御書所ヲ勤メテ、御所ノ御文庫、御自由ナリ。故ニ、義家ニ三略六韜ヲ伝授シ玉ヒ、

夷狄征討ノ將軍ノ印府（ノ）宣下有（リ）テ、重テ奥州ニ御下向有（リ）。

コレ三略六韜ハ、古往、仲哀天皇（ノ）三韓政伐（ハ）五ヶ年ノ間功ナク、二度神皇后宮、唐土エ砂金数万兩相渡サレ、軍学ノ書三十五家ノ六十部ヲ取寄玉ヒ、唐土ノ戦ノ風儀ヲ悟シ賜ヒ、日本ノ諸社ニ供奉ヲ被ニ仰付

シニ、鹿島明神、満殊・早殊ノ宝玉ヲ献ジラル。是、汐ヒル玉・汐ミツ玉ナリ。武内大臣高良朝臣、軍師ニ

テ、官軍出陣アルニ、仲哀天皇、播州ニテ薨御アリ。ミサミキ、今ニ播磨ニアリ。

后宫、懷妊ニテ渡ラセ玉フ故ニ、鑑ノ腹巻合ザルガ故ニ、武内大臣、鑑ノ脇立ヲ作り献ツル。今ニ至（リ）

テモ、是ヲ祝シテ作ル。豊前高良玉垂大明神、是ナリ。

軍船（ヲ）押出シケルニ、俄ニ御座ノ氣付セ玉ヘケレバ、后宫、天ニ誓テ曰ク、今出生アレバ海中ノモクヅ

ト成給フベシ。誠ノ皇兒ナラバ、三韓ノ征シタガヒル迄、誕生止リ玉ヘ、ト口宣アリケレバ、産ノ氣、忽ニ止デ、三歳ニシテ「宇佐ニテ御誕生アリ。天ヨリ幡ハッ流レシト云伝フ。幼名八幡磨ト奉レ申。則、応神天皇、是ナリ。因茲、三略六韜ニ限、多クノ戦書、大内ニ納（マ）リタリトナリ。

### 源義家公、後三年（ノ）戦（ヒ）之事

官軍ノ惣大将トシテ、征夷大將軍八幡太郎源義家公、康平三庚子歳二月卯ノ日、奥州、今ハ羽州屋代郷安久津村ニ着陣アリ。右ハ、巽々タル高山也。屏風ヲ立（テ）タル如クニテ、ハノ字形ニシテ、左ハ屋代河ト云（フ）大河アリ。実ニ類ヒ稀ナル陣場ナリ。斯所ニ三軍暫ク屯シ、八幡宮ヲ建立アリ。四月三日、幡揚シテ对阵ナサレケリ。

平家、強敵剛勇ニシテ、容易ニ亡（ボ）ス事アタハズ。良モスレバ官軍、危ク成ケルニ依テ、神ノ応護ニアラズンバ征伐成難カ」ラント、陣々ノ地ニ、八幡宮建立アリ。義家公御建立、置賜郡ニ七ヶ所、第一番ニ阿久津村、成島村、桐原村、奥田村、高山村、柄ノ島、大塚村、都テ七ヶ所、三年ノ間、鬪戦止ム時ナシ。大塚村ニ陣ノ岑迎、陣場ノアト、広キ原アリ。ハノ森トテ八幡太郎、陣ドリノ所アリ。義家ノ馬、藤ニケツマヅキシニ依テ、藤絶口ト誓ヒ玉ヘシト云（フ）。サシモ広キ原ナ」レドモ、一株ノ藤ナシ。將軍（＊源義家）ノ葉籠ニ扁鵲ガ製藥ヲ入（レ）玉ヒシニ、ハゲシキ戦ニ振降シ、トウ藥トナリシト云（ヒ）伝フテ、原中ニ夥シキトウヤク生ズ。陣ノ峯トウヤク迎、産物ナリ。

源平ノ両家カハルぐ盛衰有（レ）バ、天ノ命ナルカナ、赤帝衰ヒ、白帝盛（ユ）ラント云（フ）時ニ当レルガ、衣ノ館ハ前ハ栗谷川ト云（フ）大河アリ。〔俗ニ、タイヤ川トモ云フ〕。後ロハ城山連ナリ、頂ハ霞ノ離ル、」事ナキ故ニ霞ガ城トモ云（フ）。堅陣無双ノ城ナレドモ、鎌倉権五郎景政、古今无双ノ勇士ニテ、伊陀天ノ荒タル如クニテ、如何ナル堅陣モ破ラザルハナカリケリ。楚ノ項王ガ勇ニモ勝レタリト敵対スル者ナカリシ

二、鳥海弥太郎平安頼、奥州ニテ名高キ強弓ナリシガ、景政ニ対陣シ、馬上ニテ遠矢ニ景政ヲ射タリシニ、

権五郎ガ左ノ眼ニ「タチケレバ、其矢ヲ拔ズシテ、三日三夜追掛ケ、遂ニ弥太郎（\*鳥海弥太郎平安頼）ガ首

ノ骨ヲ射通シ、首ヲ提テ陣中ニ帰リシハ、誉ヌ者コソ無リケリ。今、鎌倉ニ神ニ祭りテ、五霊宮ト崇敬ス。

去レドモ、大敵ナレバ亡シガタク、或ハ勝ち、或ハ敗走シテ、三年ノ間ノ戦ヒナレドモ、勝負、更ニワカラ

ザリケル。遂ニ義家ノ爲ニ責落サレ、安部貞任、駿馬ニ鞭打テ敗北シ」ケル。

義家公、見玉ヒテ △衣ノ館ハホコロビニケリ△ ト詠ジラレシニ、貞任、馬ヲ走ラセナガラ △カ、ル世

ノ糸ノ乱レヌ苦シサニ△ ト口号ナガラ落延ビタリ。

厨河四郎平保任（\*厨川左（右）衛門に男子がなかつたので安部大夫平頼良（改名して頼時）の四男保任が

跡継ぎに入つた）、獅子ブチンノ勢ヒヲナシ、官軍ノ中、三百騎ニテ最期ノ戦ヒヲセン迪、横堅十文字ニ十二度

迄、切破リシガ、僅七八騎ニナリニケリ。遠矢ニ矢ヅクメニ仕ケレバ、保任「ニ矢所ノ矢、簀ノ毛ノ如ク、従士

皆五本十本、矢ヲ不レ負ハ無（カ）リケレバ、最早是迄ナリト静々ト城中ニ皈リ、妻子・女・童ヲ刺殺シ、腹十

文字ニ切テ、同ジ枕ニ伏シニケリ。残兵共、城中ニ火ヲカケ、敵ニ首ヲ渡サジト、火ノ中ニカケ入（リ）く、

焼死致シケリ。猛火炎々トシテ、天ノコガシテ見ヘタリ。

此時、両陣ノ死骸、幾千人ト云（フ）事知レズ。血ハ流（レ）テ、栗「谷河、丹二成テ流レ、竜田川ノ紅葉

ニヒトシ。死骸ハ山ヲ成セリ。其亡靈ヲ河ノ辺リニ祭りテ、大エゾ大権現ト祭ラレ、恒例ノ祭祀、怠ル事ナシ。

安部貞任、屋代郷ノ内、和田ト云（フ）所ニ逃ノビ、強勇ノ股肱ノ臣七八騎、殘党三百騎ニ成リ、鬪戦シテ

昼夜ヲ分タズ戦（ヒ）シニ、貞任、駿足ノ馬ノ首ヲ切落サレタリ。（今ハ馬頭村ト云フ。馬ノ首ヲ納（メ）シ小

山アリ）。是、運命ツキル」処、天、予ヲ亡スナリト云（ヒ）テ、戦ヒヲヲ不レ好シテ、生害ノ地ヲタヅネ、討殘

サレシ家臣五人、淨キ地ヲ心静ニタヅネテ（今ハ高房明神ノ社内ナリト申ス也）、貞任、甲ヲ脱捨、陣太刀ヲ

ミツカリヨウウチ 自ラ兩手ヲ掛テ首搔落シ、首ヲ抱テ死タリケリ。渡会大内蔵ヲ初メ、続テ皆々自ラ首ヲ搔落シテ死ス。

官軍、又、近付寄来レバ、腹ヲ切り差違ヒテ生害スレバ、官軍、鯨声、吐ト上」テ帰陣ス。義家公ノ陣法、

平場・大林・山沢ノ陣取、其変化、極リナシ。正兵奇兵ノ掛引有(リ)テ、前二有(リ)トスレバ、忽然トシ

テ後エニアリ。定マレル形チナシ。前九年ノ戦ヒニ功ナキヲ、三年ニシテ勝利ヲ得、奥州一國ヲ平均シ玉フハ、

三略六韜、大江師房卿ヨリ伝授ナサレシ故ナリ。文武達徳ノ名将ト感称シケリ。」

### 岩井戸御前(ト) 弥三郎、民間二落(ツ) ル事

爰ニ、平潟ノ城ニ大内蔵、討死シタレバ、家中ノ諸士、老若男女計リ残リ、十五歳以上、七十迄モ不殘、戰場

ニ討死シケレバ、萩野御前、岩井戸御前ニ向ヒ、大内蔵殿ノワスレ形見、弥三郎十三歳二成(リ)シカバ、民間

ニ落隠レ、守生育、爲君、爲父、時ヲ需テ幡ヲ揚ゲ、奥州ヲ主領セヨ、旧領ヲ興シ、亡靈ヲ安」鎮セヨ、盛ナ

ル者ハ軍陣ニ出(デ)ケレバ、残ル者ハ幼稚ノ子、老テ用立ザル者計リナリ。早々一刻モ速ク、山林ニナリト

モ身ヲ隠シ、弥三郎ヲ成長サセ、幡ヲ揚、戦功ヲ後代ニ顕ハサセヨ、我ハ思フ子細アレバ、爰ニ止リ、城中ヲ

払ハン。汝等早く落ヨ、ト宣ヘバ、住馴シ古城ヲ泣々何国共ナク落行ケリ。

戰場ニ討死シタル侍ノ婦妻、貞節ヲ守リシ女共、生テ何カ」セン。泉下ニ恩ヲ報ゼント、萩野御前諸共ニ、

花ノ盛ノ女房六十余人自害シテ、火ヲ放チシカバ、ヤグラ・モンく、殿中不殘、焼土トハナリニケリ。討洩

サレノ殘兵、山野ニ隠レ、或ハ田家ニ隠レ、皆散々、方々ニ落失タリ。

國中ノ乱騒、定リシカバ、鎮守府ノ將軍(\*源頼義)、諸所ニ堅固ニ地頭ヲ置レ、国政ヲ平治セラレ、中ニモ

安久津八幡ハ、随一ノ陣跡ナリトテ、田地」五百町寄セラレ、龍頭鍬形金ノ星、五枚シコロノ甲、金実緋綴威

ノ鏡ヲ宮殿ニ納メ、加茂(\*賀茂) 上下ノ明神(ヲ) 勧請シ、流鏑馬ノ神事アリ。大屋代ノ仮殿ヲ建、兒童ノ

舞ヲ神樂殿ニテカナデル宮社、朱ノ玉垣・廻廊(ヲ) 御建立有(リ)。

今ニ五月十五日、管粥ヲ煮テ、豊凶ヲ様シ（\*ス。方言）吉例ナリ。二月卯ノ日、四月三日、八月十五日、旧例ニ因テ、今ニ祭礼怠慢ナシ。別当神主<sup>サレタイマ</sup>幣ヲ（\*ノ）大麻ヲ捧奉リ、神事（ノ）執行アリ。屋代郷三十三ヶ所ノ惣鎮守ニシ（テ）、郷士ノ館持・祭奉行、其外、役人ヲ勤ル記録、悉ク知ルス故、略レ之。

### 弥三郎、武者修行之事

岩井戸御前（\*大内蔵平安宣の妻、弥三郎の母）ハ、弥三郎ヲ生育シ<sup>ソダテ</sup>民間ニゾ落ケルガ、農家ニ隠レ居テ、ツブレヲ着テ、芋ヲウミ、糸ヲ操リ、賤ノ女ノ業ヲナシ、田畑ヲ耕シ<sup>タガヤ</sup>産業トシテ星霜ヲ送ラレケルニ、早ヤ、弥三郎十七歳ニゾ無リ（\*成リニ）ケル。

石流、大内蔵（\*平安宣）ガタネナレバ、力量衆人ニ過タリ。山ヘ出テハ木ヲ切、木刀ヲ拵ヒ、劍術ヲ執行シ、野ニ入（リ）テハ陣法ヲ学ビ、水ニ入（リ）テハ農馬ニ鞭ウツテ水ヲ修練シ、深山ニ寄テ雲氣ヲ学ビ、弓馬ニ妙アリ。春ノ夜ノ短キニモ灯火ヲ照シテ永キ書籍ヲ読、生質、剛勇ニシテ柔和、顔色仁儀（\*義）ヲ守リ、法則ヲ犯サズ、大膽ニシテ心細カナリ。稀ナル若者ナリ。

是時、旧臣ノ娘ヲ嫁シ（テ）妾婦ニナシ、一子ヲ産リ。弥三郎、二十歳ニナリシニ、母ノ岩井戸ニ願ヒケルハ、今一度、殘党ヲカリ集メ、幡ヲ揚、君父ノ爲ニ、トブラヒ合戦ナリトモ致シ度思ヒドモ、不足ノ事アリ。八幡太郎義家、大江師房卿ニ（\*ヨリ）三略六韜ヲ伝授シテ陣法、前九年ヨリ後三年ノ軍ノ備ヒ、拔群ナリト聞。何卒、武者修行ト成テ（\*ヲ成シ遂ゲテ）此書ヲ奪ヒトリ、陣法ヲ教テ將帥ヲ主宰度思フナリ。暫時ノ中、御暇下サレタシト願ヒケレバ、母（ハ）大（イ）ニ喜ビ、予モ汝ヲ一刻モ早く成長サセ、君父ノ仇ヲ報ゼン事ヲ思ヒドモ、大望ナレバ一年二年ニ指ヲフセテ待（\*待つ 方言）事久シ。汝ガ妻子ヲ少シモ案ズル事ナカレ。其許ノ飯ル迄ハ大切ニ生育テ、蚊虻ニモ刺セズ、荒キ風ニモ不当程ニ、嫁婦モ貞節ヲ守リ、甚ダ孝ヲ行ヒ、道ヲ守ル者ハ、懦弱ニ落入ラズ、必ス心ヲ置事ナカレ。不自由ナク養育ス（\*テ）ル程ニ、我等（ノ）

事(ヲ)少シモ心ニ掛<sup>カ</sup>ベカラズ。早<sup>ハヤ</sup>ク本望<sup>ホンモウ</sup>(ヲ)達<sup>タツ</sup>シ、目出度<sup>メデタク</sup>帰国<sup>キコク</sup>スベシ、トイサギヨクノ玉<sup>タマ</sup>ヘバ、動乱<sup>ドウラン</sup>ノ時、親<sup>ヲヤ</sup>ヲ討<sup>ウタ</sup>レ、兄<sup>アニ</sup>ヲ討<sup>ウタ</sup>レシ旧臣<sup>キウシン</sup>ノ未<sup>ミ</sup>葉<sup>ヨウ</sup>、百有余<sup>イツヨウカ</sup>家<sup>カ</sup>アリ。是<sup>コト</sup>ヲ召<sup>メシ</sup>寄<sup>ヨセ</sup>テ饗<sup>フ</sup>応<sup>オウ</sup>シ、首途<sup>カドベテ</sup>ノ祝<sup>イハヒ</sup>ヲシ、皆送<sup>ソウ</sup>別<sup>ベツ</sup>シテ、武者<sup>ムシャ</sup>修行<sup>シュウギョウ</sup>ニゾ出<sup>デ</sup>ニケル。

是<sup>コト</sup>ヨリ常陸<sup>ヒタチ</sup>ノ国<sup>クニ</sup>ヲ初<sup>ハジメ</sup>テ心志<sup>シンシ</sup>、筑波<sup>ツクバ</sup>山<sup>サン</sup>ハ日本<sup>ニッポン</sup>ノ山<sup>ヤマ</sup>ノ開闢<sup>カイビヤク</sup>ノ地<sup>チ</sup>ナレバ、參詣<sup>サンケイ</sup>セント男体山<sup>ナンタイサン</sup>・女体山<sup>メタイサン</sup>江登<sup>ノボ</sup>リ、陰陽<sup>インヤウ</sup>ノ餅<sup>モチ</sup>ヲ喰<sup>クラ</sup>ヒ、男女<sup>オナナ</sup>ノ河<sup>カワ</sup>ノ水元<sup>ミナモト</sup>ナリト一見<sup>イチケン</sup>シ、龍宮<sup>リウキョウ</sup>ヨリ獻<sup>ケン</sup>ジタル鐘<sup>ショウ</sup>ヲ拜<sup>ハイ</sup>シ、桮<sup>フモト</sup>エ下<sup>シ</sup>リ筑波<sup>ツクバ</sup>權現<sup>ケンゲン</sup>、朱<sup>アカ</sup>ノ玉垣<sup>タマギキ</sup>、廻廊<sup>クワイラウ</sup>ノ結構<sup>ケツコウ</sup>ナル宮殿<sup>ミヤテン</sup>ヲ伏<sup>フ</sup>シ拜<sup>ハイ</sup>ミ、夫<sup>ソレ</sup>ヨリ鹿島<sup>カシマ</sup>三社<sup>サンシャ</sup>ヲ心掛<sup>シンケ</sup>行<sup>ギョウ</sup>シガ、比叡<sup>ヒエ</sup>野<sup>ノ</sup>ニ出<sup>デ</sup>テ日<sup>ヒ</sup>グレテ一里<sup>イチリ</sup>程<sup>チヨウ</sup>モ行<sup>ユキ</sup>ケルニ、松木<sup>ライシシ</sup>ノ生茂<sup>シゲモ</sup>リタル所<sup>トコロ</sup>ニ火<sup>ヒ</sup>ヲ燒<sup>タ</sup>キ、山賊<sup>サンゾク</sup>トオボシキ者<sup>モノ</sup>七八人<sup>シチハチニン</sup>、長<sup>ナガ</sup>キ刀<sup>カタ</sup>ヲ横<sup>ヨコ</sup>タイテ、燒火<sup>タキビ</sup>ノ巡<sup>メグ</sup>ニ居<sup>イ</sup>タル。

前<sup>マエ</sup>二入<sup>ニイル</sup>(リ)テ、煙草<sup>タバコ</sup>ノ火<sup>カ</sup>ヲ借<sup>カシ</sup>タマイ、ト云<sup>イフ</sup>(フ)。其<sup>ソノ</sup>頭<sup>カビ</sup>ト見<sup>ミ</sup>ヘテ、六尺<sup>ロクシツ</sup>有余<sup>ヨリ</sup>ノ大<sup>オホ</sup>ノ男<sup>オトコ</sup>、旅人<sup>リョウジン</sup>ト見<sup>ミ</sup>ヘタリ。路金<sup>ロキン</sup>ノ貯<sup>チ</sup>ヒアラン。我等<sup>ワレタ</sup>ハソレヲ借<sup>カ</sup>ル者<sup>モノ</sup>共<sup>トモ</sup>也。違背<sup>キハイ</sup>スレバ衣服<sup>イフク</sup>迄<sup>イフク</sup>剥取<sup>ハキトル</sup>ナリ。路金<sup>ロキン</sup>殘<sup>ノコ</sup>ラズ置<sup>オキ</sup>テ通<sup>トウ</sup>レ、ト云<sup>イフ</sup>(フ)。弥三郎<sup>ヤサロウ</sup>ガ答<sup>コタヘ</sup>テ、我<sup>ワレ</sup>達<sup>タチ</sup>ガ見<sup>ミ</sup>ル通<sup>トウ</sup>(リ)ノ浪人<sup>ラウジン</sup>ナレドモ、少々<sup>シウシウ</sup>ノ貯<sup>チ</sup>ヒアリト雖<sup>イヘド</sup>モ、是<sup>コト</sup>ヲ汝<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>ニツカワシテハ輕廻<sup>ケイクワイ</sup>スル」事<sup>コト</sup>叶<sup>カナ</sup>ハズ。去<sup>サ</sup>レドモ只<sup>タゞ</sup>ハツカハスマジ。勝負<sup>シヤウブ</sup>之上<sup>ノウエ</sup>ニ何<sup>ナニ</sup>レ共<sup>トモ</sup>スベシ。立<sup>イチ</sup>(チ)上<sup>ウエ</sup>(ガリ)テ勝負<sup>シヤウブ</sup>セヨ、ト云<sup>イフ</sup>(ヒ)テ、赤銅<sup>シヤクトウ</sup>作<sup>サス</sup>ノ二尺<sup>ニシツ</sup>八寸<sup>ハチサウ</sup>(ヲ)拔<sup>ヌイ</sup>テ、八双<sup>ハツソウ</sup>ニカマイシカバ、若者<sup>ワカモノ</sup>ニ似<sup>ニ</sup>合<sup>ア</sup>ザル太<sup>フツ</sup>キ奴<sup>ヤツ</sup>ナリ、ト皆<sup>モトモト</sup>々<sup>トモトモト</sup>拔連<sup>ヌキツレ</sup>戦<sup>セ</sup>ヒシガ、何<sup>ナニ</sup>カハ以<sup>モツ</sup>テ、タマルベキ。

虎乱<sup>コラン</sup>青眼<sup>セイガン</sup>ノ術<sup>ジュツ</sup>ヲツクシ(テ)戦<sup>タ</sup>ヒケレドモ、太刀<sup>タチ</sup>ヲ打落<sup>ウチヲト</sup>サレ、ミネ打<sup>ウチ</sup>(チ)ニ半死<sup>ハンシ</sup>半生<sup>ハンシヤウ</sup>ニ打<sup>ウチ</sup>レケレバ、地<sup>チ</sup>ニ平伏<sup>ヘイフク</sup>シテ、何卒<sup>ナニト</sup>、一命<sup>イチメイ</sup>ヲ御助<sup>ミタスケ</sup>下<sup>ゲ</sup>サラバ、生々<sup>セイセイ</sup>世々<sup>セセ</sup>ノ御厚<sup>ミコウ</sup>恩<sup>オン</sup>ナリ、ト泣<sup>ナミ</sup>(キ)ナガラ詔<sup>ワビ</sup>ケレバ、「大望<sup>マウ</sup>アレバ汝<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>ヲ助<sup>タスケ</sup>ルナリ。武者<sup>ムシャ</sup>修行<sup>シュウギョウ</sup>ノ身<sup>ミ</sup>ナレバ芸<sup>ゲイ</sup>ヲ見<sup>ミ</sup>ル迄<sup>キ</sup>ナリ、ト云<sup>イフ</sup>(ヒ)ケレバ、皆<sup>モトモト</sup>々<sup>トモトモト</sup>喜<sup>ヨロコ</sup>ビ初<sup>ハジメ</sup>テ活命<sup>カクメイ</sup>(ヨミガイリ)シタル心地<sup>ココロ</sup>ニテ、御侍<sup>ミコサマ</sup>、此山<sup>コノヤマ</sup>陰<sup>カゲ</sup>ハ我<sup>ワレ</sup>々<sup>トモトモト</sup>ガハニフノ住居<sup>ジュキョ</sup>ナリ。一夜<sup>イチヤ</sup>、明<sup>アカ</sup>(カ)サセ玉<sup>タマ</sup>ヘト云<sup>イフ</sup>(フ)。何処<sup>イツコ</sup>ヲアテド、云<sup>イフ</sup>(フ)事<sup>コト</sup>ナケレバ、然<sup>シカ</sup>ラバ宿<sup>ヤド</sup>ヲ借<sup>カシ</sup>(テ)クレイ、ト皆<sup>モトモト</sup>々<sup>トモトモト</sup>伴<sup>トモ</sup>ビ賊<sup>ゾク</sup>ガ家<sup>イ</sup>サシテ行<sup>ユク</sup>(キ)ケルガ、上座<sup>ジョウザ</sup>ニ請<sup>シヤウ</sup>ジ、酒肴<sup>サカナ</sup>ヲ出<sup>デ</sup>シ、殊<sup>コト</sup>ノ外懇<sup>ネンゴン</sup>ニモテナシ、酒宴<sup>シュエン</sup>半<sup>ハ</sup>(バ)ニ弥三郎<sup>ヤサロウ</sup>尋<sup>タツネ</sup>シハ、此<sup>コノ</sup>辺<sup>ヘ</sup>ニ劍術<sup>ケンジュツ</sup>ノ道場<sup>ダウヂョウ</sup>ハナキカ、ト問<sup>トヒ</sup>ケレバ、鹿島<sup>カシマ</sup>



(ノ) 狩野左馬之進トテ、隣国ニ隠レナキ大名アリト云(フ)。然(レ)バ推參致シ、劍術試ミ度モノナリ、ト云(ヒ)ケレバ、料理モ上(ゲ)度思ヒトモ、山家ノ事ナレバ調ヒガタシ。サリトハ鹿忽ノ至リ、ト云(ヒ)テ、長本(\*張本)トヲボシキ男、金子十兩サシ出シ、御修行ノ御身ナレバ、御道中、雑用ノ助ケ共ナシ下サレタシ、ト云(ヒ)テ差出ケレバ、予ニ大望アリ。幡揚ントキ、廻(ク)文ヲ出ス。其時、合力スベシト云(フ)。ヤクソクシルスンシ約東ノ印シ也ト寸志(ヲ)御請下サレタシト云(ヘ)バ、暫(シ)ノ中、預ルベシト懷中ニ納ル。再会ヲ期シ、鹿島ニコソハ尋ネ行(ク)。

大神宮ヲ伏拝ミ、小物忌・高天ノ原・要石・神鎧ヲ拜シ、神社古ビテ靈々タル神木、森々タリ。誠ニ武士ノ祈誓スベキ尊神ナリ、ト瞻ニ銘ジ、一七日通夜シ、夫ヨリ狩野ノ道場江尋ネ往シカバ、会日(ト)見ヘテ、弟子大勢(ガ)寄合タリ。鄙(イ)ノ者、武者修行ニ候ガ御高名ノ道場承リ(テ)推參仕候間、御面談奉レ願旨申(シ)入(レ)ケレバ、則、弟子立出、案内シテ道場江入レニケリ。高座仁師匠、高弟左右ニシテ、門弟(ハ)列ヲ正シク並居タリ。

應對ノ礼終テ、高弟ノ伊藤兵太夫(ガ)出テ、面・頬・小手ヲ堅メ、試ミノ勝負、木太刀ニテ立会シガ、四分六分ニツカイ、弥(三)郎(ガ)負ケレバ、師匠ヲ始(メ)門弟迄、気色和ラギテ見ヘニケリ。段々夫ヨリ門弟ツカイケルニ、何レモ四分六分ニ計リ負タリシカバ、皆々喜ノ色ヲ催シ、酒ヲ出シテ酒宴ニコソニ成リニケル。酒宴タケナハニシテ、師匠モ木太刀ヲ取テ、立合(セ)ラレシニ、三分七分ニツカツテ負タリシニ仍テ師弟ノ約ヲナシ、半年計リ逗留セリ。

下々ノ門弟ニハ芸ゾ立負ケレバ、殊ノ外、門弟共ニ睦敷ナリ、師匠モ隔意ナク指南シケル程ニ、武者修行モ、弟子ト成タル事、上江モ聞ヒケレバ、高名弥増、弟子大勢ニナリ、上ヨリモ御加増有(リ)テ、益、繁昌シケレバ、先生モ、弥三郎ガ故ニカクハ成タリ、ト思ハレシカバ、先弟ヨリモ慈愛深カリケリ。



永々ノ逗留ニナリシカバ、師ハ暇ヲ乞ケレバ今」一年モ道場ノ世話ヲ致シ(テ)クレヨ、ト猶又留ラレ、  
 二ケ年ヲ過シ、諸国ノ道場ヘ入(リ)テモ不恥ヤウニトテ、家ノ秘伝不殘伝授セラレタリ。

上方ヲモ一見シ修行致旨、強テ願ヒシカバ、師匠、衣服・旅装束ヲ合力シケレバ、門弟中、送別シテ、銀  
 五文目・三文目合力シテ、酒肴ヲ持(チ)、船ニテ息柄・香取迄送り、再会ヲ期シ、名残ヲヲシミ別レケル。

香」取ハ下総ノ一ノ宮ナレバ參詣シ、心謚ニ武藏野サシテ登リケル。是ヨリ、国々ノ道場々々ヲタツネテ入  
 リケレ共、四分六分ニ負(ケ)テ通りシカバ、五日十日、或ハ三月四月逗留シ、饒別ノ合力、銀一枚二枚ヅ、  
 恵ニ預リ通りシ程ニ、路用ニ乏キ事ナク、国ヨリ持出(ダシ)タル金ヨリ余計ニナリ、暑ニモナレバ夏着ノ物  
 ヲ合力サレ、見苦シカラズ修行シテ、京都」二着、旅宿ニ泊リ、五七日モ過ギ、当上(※堂上)方江奉公ノ望  
 ラ啍シ、中ニモ大江ノ師房卿ノ屋形ヲ好ミシカバ、当上方出入ノ者ニテ、則チ大江公ニ奉公シケリ。和歌・  
 連哥ノ道ヲ心ガケル人ナラント容穆イヤシカラザレバ、一入、念ヲ入(レ)テ世話シケリ。

虫干ノ時ハ、書籍モ開カル物ナラント、心ヲ尽シ奉公シケリ。土用モ過シカドモ、何ノ事モナシ。七月七日  
 ニ至リ」テ、書、少シハ干レケレドモ、望ム所ノ書ハ曾テ見ヘヌ。是、秘書ナルニ依テ大内ノ御文庫ニ納(マ)  
 リタル物ナラン。容易盜ミ取ルベキヤウナシ、ト思案ノ(※ヲ)定メ、唐土ヘ渡リテ求ヨリ外ナシ、ト出更リ  
 迄首尾能勤テ、口入(レ)ノ宿ニ販リ(テ)暇乞シテ、肥前ノ長崎一見シタキ旨ヲ啍シ、又一兩年ノ中ニ販リ  
 登ン、ト約束シテ出立ケリ。

### 弥三郎、三略六韜ヲ得ル事」

是ヨリ西国ヘコソ心掛、又、道場ヲ尋ネ々々修行シ、豊前国宇佐八幡宮ヘ參詣シテ、一七日參籠シテ心願シ、  
 高良玉垂大明神ニ一七日籠リ、誠祈ヲ抽ンジ願望シケルニ、七日満夜、少シマドロミケルニ、白髪ノ翁、束帶  
 ニテ、鳩ノ杖ヲ引(キ)、忽然ト顯レ、汝ガ忠孝ニ依テ、好ム所ノ書ヲ授ルニ仍テ、大宰府大林寺ニ往(ク)ベ

シ、ト告玉フト見ヘシガ、其俣、夢覺タリ」ケリ。

夫ヨリ猶々信心肝ニ銘ジ、幣ヲ捧奉リ、再拜シ、大宰府サシテ急ギケリ。謀計ヲモウケ大林寺ニユキ、其時ノ住寺(ハ)智識ニシテ、同宿ノ僧数多、雲水・行脚・隨身ノ僧百有余人、其寺ヘ往(キ)案内ヲ乞(フ)。

拙者コト奥州ノ者ニテ、武者修行ニ經廻仕ル者ニ御座候ガ、明後十五日、亡親ノ年忌ニ相当ル法会ノイトナミ奉レ願度、登山仕候。此趣キ、利シク御取次給リ度旨申入(レ)ケレバ、此儀、住寺ニ伺ヒケレバ方丈(ガ)面談シ、容体ヲ見ルニ不レ賤侍ナリ。住寺(ガ)申サレケルハ、仏事・供養ハ僧等ガ職分ナリ。貴殿(二ハ)旅国ノ事ナリ。奇特ノ心底(ヲ)サツシ入(レ)、能ニ量ヒ申スベシ。先々、客寮ヘ御案内致スベシ、ト役僧ニ申附(ケ)、方丈ハ入(ラ)セケル。

弥三郎ハ客寮ニ往、香奠トシテ金子五両差上ケレバ、料理供物ノ支度有(リテ)施餓鬼識法ノ仏事(ヲ)執行セラレタリ。誠ニ、亡魂仏果得玉フラン、ト殊勝ナリ。

是ヨリ二三日逗留スル内、同宿ノ僧達ハ餅菓子杯ヲ買寄与ヒケレバ、甚ダ睦テ方丈ヘモ実体ノ仕方トリナシケレバ、室ノ間ニテ面談アリ。世間説話等(ヲ)ナサレテ、予モ若イ折、奥州・塩竈・松島(ヲ)一見シ、象潟ヲ見テ、松前二年ヲ越タル事ナド(ヲ)語ラレ、貴殿ノ武者修行モ」我等ガ雲水ニ異ナラズ。氣遣ナク永ク逗留シテ、氣ヲ休メ玉フベシ、ト信実ニ申サレケレバ、誠ニ古郷ニ有(リ)シ心地シテ談話シ、在時、住寺申サレケルハ、武者修行(ヲ)仕玉フハ、劍術・兵法ヲ修練セン爲ナルベシ。千手觀音モ手足(ガ)沢山ニテハ反テ障リアルベシ。心一ツノ事ナリ。唯心ノ浄土・己身ノ弥陀ト云(フ)事モ心一ツナリ。三界唯一心無別法ト云フ。」軍将ヲモ主宰スル身ニシテハ軍学ナリ。

此寺ニ代々秘シテ置シ孫子・梟子、三略六韜ノ書アリ。此書ヲ悟持セバ、国家ヲ治メ、不レ戰シテ勝ノ利アリ。是ヲ学バンヤ、ト教化シ玉ヘケレバ、元ヨリ此書ヲ望(ミ)テ、高良明神ノ告ニ依テ此寺ニ来リシ事ナレバ、

喜悦ノ眉ヲ開キ、何卒其書ヲ御伝授奉願ト、恐敬シテ居タリケレバ、和尚（ハ）博識ノ人ナレバ、其書ヲ披テ講実ヲ訳テ、委悉ニ読聞セラレシカバ、昼ハ評解ヲ聞、夜ハ灯火ノ本ニ写シトリ、三年ニ満ズシテ、悉ク伝授シタリケレバ、帰国セン事ヲ思フ。

是迄修行ニ出テモ十余年ヲ早過タリ。国ニ有（リ）シ母モ、嘸、案事ツラント方丈ニ、国ニ母・妻アル事ヲ演舌シ、一ト先、帰郷致シ度旨（ヲ）語リケレバ、古郷へ帰ル人ヲ止ムベキアラズ、ト」方丈モ老僧ナレバ、再々會期シ難シ。永キ来世ニテ逢ベシ泪ナガラニ旧領ノ国ヲ去ル如クニシテ別レケリ。

### 弥三郎母岩井戸、鬼女ト成（リ）テ飛行自在スル事

爰ニ又、弥三郎（ノ）女房、修行ニ出（デ）シ翌年ノ春正月ヨリ、劳症ノ如クニ病ツキ、内熱強クシテ、痰ヲ吐、食事モ次第ニ減ジ、ヤセ衰ヒシ程ニ、幼稚ノ子、乳ヲ不レ吞故ニヤ、疳症ヲ煩ラヒ」腹滿シテ、手足ホソク、ヤセ衰ヒ、熊ノ膽・藥制ヲ色々用ヒケレドモ功ナク、是ヲ苦ニシケルニヤ、妾ノ病、弥、重リ、近郷ノ医者、御典藥ノ療治、尽スト雖モ、其驗モ不レ見、翌年四月八日、朝ノ露トゾ消ニケル。隣家ノ者、寄集リ、葬礼ヲイトナミケリ。其子モ又、三日モ過ザルニ夕部ノ霜トゾ消ニケリ。

夫ヨリ弥三郎（ノ）母ハ狂氣ノ如クニナリ、扱々、残念ナリ。予レ預リシ妻子、武者修行（ガ）終テ歸ル迄ハ守リ生育、無事ニ対面シ、祝ノ顔ヲ見テ、親子会顔スベシト思ヒシニ、何ノ面目有（リ）テカ面ヲ合（ハ）セント、一度ハ歎キ一度ハ怒リ、鬼女ノ如クニ成（リ）、泣口解ク。目モ当ラレヌ風情ナリ。七日断食ニシテ、水モ絶テ伏シ沈ム。然ルニ、一夜ノ内ニ髪ハヲドロニ、白髭ヲ冠リシ如ク白髮ノ姥ト成（リ）「往昔、漢朝ニ能書有（リ）シガ、十五丈ノ楼上ニ竹籠ニノセテ、細引ニテ釣揚（ゲ）、額ヲ書（カ）セケレバ、下落シテ見レバ、白髮トナリシ人アラン。古ヲ思ヒバ、コレヲ類ヒ、是アラシカ」。

是ヨリ悪行増長シテ、弥三郎（ノ）歸ル迄ニ軍用金ノ（※ヲ）貯テ幡ヲ揚（ゲ）サセント、盜賊（ノ）張本

トナリ、先年、戦ヒニ討洩サレテ山野ニ隠レ居リシ者共ヲ手先ニツカイ、野・林ノ茂リタル所ニ昼ハ身ヲ隠シ、夜ハ人家ノ遠キ所ニ出テ旅人ヲ剥取、生血ヲ啜テ肉ヲ喰ヒ、狼ヲ仕フニ死骸ヲ与ヒテ馴附、風ヲ起シ雲ヲ起シ、飛行自在(ニ)シ(テ)東山・朝日嶽・飯豊山・大荒沢・須溜上山(ヲ)一夜ノ内ニ駈巡リ、或ハ鳥海山・羽黒山・月山・蔵王ヶ嶽・南部ノヲ山迄一夜ノ内ニ経廻シ、人ヲサラツテ金銀ヲトリ集ム。福者分限ノ土蔵ヲ蹴破テ千金ヲサライ取(リ)、生血ヲ吸、肉ヲ食フ。山人・山姥トハ是等ノ類ヲヤ云(フ)ベキカ。

弥三郎ガ屋鋪ハ荒果テ生茂リ、ムグラニシテ樹木、日モサス事ナキ破レ家ニ、姥独リ昼ハ糸操シテ賤ノ女ノ業ヲシ、隣リ近所ノ人ニ斯ハ見セニケリ。夜ハ居ル事ナケレドモ、是ヲ知ル者更ニナシ。死骨ハ奥ニ山ヲナセリ。通力ヲ以テスル事ナレバ、俗人曾テ以テ知ル事ナシト云々。(今ニ弥三郎姥ガ仕居(セ)シ川戸石アリ。屋鋪ハ畑ニ成タレドモ、死骨夥シク出ルトイウツトウトカヤ)。

# 白山大権現岳(ノ)跡之事

其時ニ当テ夏旱魃シ、田ヲ植(ル)ベキヤウナク、適シ水窪ノ所ニ稻ヲ植タレドモ、稻ノ花咲頃ニ成テ、暴風・大雨降りテ、田畑共ニ一面ニ海ノ如クニ水タ、イ、五日モ七日モ水ノ引(ク)事ナケレバ、水腐ト成テ一円ニ不実、三ケ年続テ荒ケレバ、田地ハ葦ノ根(ガ)畔ヨリ生茂リ、マエ萩・犬稗、草ハ延テ荒果タリ。農夫(ハ)食物乏(シ)ク、川骨ノ根ヲ粮ニシ、或ハ松ノ皮ヲ餅ニ、搗、山ニ入(リ)テハ、百合・ワラビノ根ヲホリ、紙スキノ様ニ打(チ)タ、キ、其水ヲイセテ、ヨゴミヲ干シテ粉ニ拵ヒ、大豆ヲ入(レ)テ粥ニ煮テ喰ヒ、漸々ト命ヲツナグト雖モ、傷寒疫(ガ)風流テ、兼テ鹿食シタル身ナレバ、十二六七分程、死(ニ)タリ。人民(ハ)是ヲ歎キ、市川在家ノ者共、不殘ヲ村長ヲ先立テ、屋代郷ノ惣鎮守ナレバ、大屋代ノ宮ニ断食シテ一七日參籠ス。

抑、此御社ハ、日本武尊(ノ)夷狄征伐ノ時、神軍ノ陣中也。粥ヲ煮ラレシ釜ヲ掛玉ヘシ櫻ト号シテ今ニアリ。

日本武尊、出雲国素戔嗚尊ヲ勸請シ、十町四方ノ社地也。古木・樫・杉・枋・榎、何千年ト云（フ）事ヲ知ル  
 人ナキ古木、森々ト生茂リタリ。人民、社頭ノ建立ニモ一株モ伐事不能ハ、靈々トシテ貴キ神社ナリ。屋代第  
 一ノ社頭也。

人民、信心命」ヲ惜マズ誠祈ニ心肝ヲコラシ、五穀豊饒・国家安全ヲ祈リシカバ、感応マシクテ、七日ニ  
 満ル夜、幻ノ如ク、金ノ甲・鎧ヲ召シ、八千戈ヲ持テ、スサマジキ御顔色、身ノ毛モヨダツテ廓頭トシテ、汝等、  
 是ヨリ一里下（リ）テ、白子山ト云（フ）山（ノ）八分ニシテ岩窟アリ。是、白帝ノ兒ナリ。則、白山姫ナリ。  
 今障リヲナスハ赤帝ノ兒ナリ。汝等、白山姫ノ命ヲ信仰セバ災禍」有（ル）マジ、ト告玉ヘテ、霞ノ如ク消ニ  
 ケリ。

里人等、感涙ヲ流シ、信心益深ク、奉幣・大麻ヲ捧ゲ、白子山ノ岩窟ニ登リ、一七日参籠シテ祈願シ、丹誠  
 ヲ尽スケレバ、七日ニシテ満願ノ夜、忽然トシテ女性顯レ、玉ノ簪ヲイタゞキ、白クスキ通ル御肌、金襴ノヒ  
 タ・バレノヤウ成（ル）ヲ召シテ、予ハ白山姫ナリ。既ニ神勅アリ。早魃・水腐ノ地ニ宮ヲ建立シ、白餅・苧」  
 柄ノ箸・百膳（ヲ）備ヒ祭ルベシト、カキケス様ニ失ニケリ。感応、膽ニテツシ、感涙ニ及ビ、里ニ帰リ、時  
 日ヲ過ザルニ宮ヲ建立シ、三月廿八日ニ成就シ、其夜、白子山ヨリ光物飛来リ、宮殿ニ入ル。誠ニ難レ有宮也。  
 白山姫ノ命ナレバ、白山大権現ト奉レ祭（リ）。

豊作ヲ祈ル。疱瘡・ハシカ・腫物ノ類ヲ祈ル。立願、不叶ト云（フ）事ナシ。靈驗アラタナル事、言語  
 ニ絶ス。」

神ニ神体シ、正直ヲ以テ神体トス、トアレドモ、何レノ頃ヨリ祭リ来ル者カ、一尺二寸バカリノ神体アリ。  
 「俗ニ春日ノ御作ト云フ」。今ハ石（イシ）ノ宝殿ニ在座。此神体、満水ノ時、一面ニ海ノ如クナル水ニ流レ  
 テ、子共等ノ手ニタワブレテ、又イツトモナク神殿ニ皈リ在座。宮建替ノ時、別当ニ奉レ移シニ（\*移シ奉リシ

二)、枕返シテ尻ヘニスル事、不<sup>レ</sup>叶。誠ニ不思議ノ神体ナリト、生神ノヤウニ尊敬ス。是ヨリ水旱ノ愁<sup>ウレ</sup>ヒナク、豊作打続キ、百姓<sup>ヒヤクセウ</sup>(ハ)安樂ニ産業ヲナセリトナリ。

### 弥三郎、故郷江辰ル事

カク  
斯テ、弥三郎ハ大林寺ヲ出立、武者修行ヲ艸々ニシテ帰路ニ心ヲ急ギシガ、故郷ヘハ錦ヲ着テ飯ルト云(フ)事アリ。一決シタル衆ニモ対面アシカリナント思ヒ、京都ニテ羽二重・縮緬ニテ衣服ヲ拵ヒ、道中ハ馬<sup>ムマ</sup>(ニ)ノリ、羽織ヲ着シ<sup>ハヨリ</sup>「萌黄・羅紗ノ陣羽織、緞子ノ野袴、小風呂敷ニ包ミ、肩ニ両掛ニシテ、中仙道ヲ下リ、日光ヨリ高原峠ヲ越テ、南ノ山通りシテ、奥州サシテ下リケル。会津ヨリ樋原ヲ通り、米沢ノ城下ニ止宿シ、弥三郎、思案ヲシテ、

○へ往昔、漢朝ニ戦(ヒ)始リ、陣触(レ)有(ル)ニ随(ツ)テ、若キ女房・幼稚ノ子共計リ残シ、主命ニ応ジ、七ヶ年、戦場ニ有(リ)シニ、利アラズシテ、家ニ皈リシニ、女ハ三年逢(ハ)ザレバ心<sup>ム</sup>変ズ(ト)云(フ)事アリ。

夜中ニ入テ、様子ヲ見テ、其上ニ家ニ入ラント思ヒテ、夜半ノ頃、家居ヲ伺ヒシニ、門ノ屋根モ破レ、家宅モ破レ、屋根ヨリ月(ノ)洩(ル)計リニナリシモ、予、留主ノ事ナレバ、斯有(ル)ベキハズナリ、ト感心シ、門ノ貫ノ木、閉(メ)タレバ、家ヘ入ル事ナラズシテ、伺ヒ居タリシガ、甲鎧ヲ着、陣太刀ヲ帶シ、鉾ヲツイテ、夜巡リヲシテ、ソコ爰ト見マワシ、門ノ貫ノ木、改メ、家ニ入(ル)。

是ハ、定メテ、後ノ夫ナラント考ヒ、七ヶ年、音信セザレバ斯有(ル)ベキ<sup>ム</sup>筈ナリト思ヒ、何ニモセヨ、家内ヘ入(リ)テ見ザランヤ、ト高声ニ、今、主ジ、帰国セリト呼(バ)ハリケレバ、女房、立出テ、迎(ヘ)入(レ)、嬉シゲニ、七ヶ年ノ間、妾ガ心苦ヲ語り、子ヲ養育シタルヲ語ルニ、二心有(ル)共見ヘズ。只二人シテ暮(ラ)セシ事ヲ語ルニ、外二人有(ル)トモ見ヘズ。

先刻、鎧・申ヲ着、夜巡リヲセシハ、誰ゾト問（フ）ニ、女房、笑（ヒ）テ答（ヘ）テ曰（ク）。アレハ妾ナリ。留主ト見テ、人ノ悔ル事有（ル）者ナレバ、男ニ出立（\*男の姿をして、の意。デタチ、と読む）、七ヶ年間、毎夜、斯ノ如シ、ト云ヒケレバ、夫モ貞節（ノ）深切ナル事ヲ感心シ、夫レヨリ夫婦中（※仲）睦シク、一生ヲ過ゲセリ。

是ヨリシテ、案内ト云（フ）文字（ノ）始リシト云（フ）古事ヲ考ヒ、予モ夜ニ入テ、家内ノ様子ヲ見テ、入ラン者ヲ、ト。

是ヨリ、弥三郎、装束（ヲ）立派ニ改メ、日ノ暮ヲ待テ宿ヲ立（チ）、夜中ニ広キ原ニカ、リ、横一里・堅二里余ノ原アリ。富士ノ裾野ニ異ナラズトテ富士野ト云（フ）。爰ヲ通りシニ、松・栢（ノ）長ノビ茂リタル所ニ詞堂アリ。春日大明神ヲ勧請シタル社アリ。此木立ニ山賊共、昼ハ乞食ト見セテ飯ヲ焼キ、竈リ居ル。〔今ハ俗（ニ）呼テ盗人神ト云フ〕。

夫ヨリ二三町程往（キ）テ、格子嶽ヲ源ニシテ、四和田ヨリ落込（ミ）シ川アリ。拾余間ノ橋アリ。以前ハ舟ニテ渡リシヤ、舟橋ト云（フ）村アリ。和田河ト云（フ）。〔俗ニオツカナ橋ト云フナリ〕。

橋ノ両脇ニ、山賊共火ヲ焼散シテ、十人計リ居タリケルガ、弥三郎、絹布ニテ、サワヤカニ出立、大・小（ヲ）十文字ニ差、小風呂敷包ミ（ヲ）肩ニ掛テ、オメズ臆セス通りシニ、頭ト見ヘテ六尺余長ノ大ノ男、声ヲ掛（ケ）、旅ノ御侍、爰ハ追剥所ナリ。懷中ノ金、不レ残置テ通ラレヨ、ト云（ヘ）バ、弥三郎、完爾ト笑ヒ、是ハ迷惑千万。野ノ金子ハツカイ切り、酒手位ハツカワスベキ、ト鼻紙袋ヨリ小判一枚投出シ、是ニテ通シ（テ）呉ヨ、ト云（ヘ）バ、ソレ計リニテハ、大勢ニ割レバ何ニモナラズ。衣服ヲ脱デ通レ。金子ナクン」バ是非ナシ、ト云（ヒ）ケレバ、弥三郎、衣服ナクテハ内ニ飯ラレズ。平ニ許シテ通セ、ト云（ヘ）バ、曲者（ヲ）ノガスナ、ト手下ノ賊、両袖ニカ、リケレバ、兼テ大力無双ノ弥三郎、剣術ノ名人ナレバ、何カハ以テ



タマルベキ。河中<sup>カハノナカ</sup>二人ツブテニ打<sup>ウツ</sup>テ投入<sup>ナゲ</sup>(レ)タリ。残り<sup>ノコ</sup>之者共拔連<sup>ヌキツレ</sup>テ皆々一度ニ掛<sup>カ</sup>(カ)リケレバ、二尺八寸<sup>コホリ</sup>ノ氷<sup>コホリ</sup>ノ如<sup>カ</sup>クナル刀<sup>カタナ</sup>ヲ拔<sup>ヌキ</sup>テ渡<sup>ワタ</sup>リ合<sup>アイ</sup>、ミネ討<sup>ウチ</sup>ニシテ半死半生ニ擲<sup>タ</sup>伏<sup>キフ</sup>セ、大望<sup>タイマウ</sup>アルニ依<sup>ヨツ</sup>テ、暫時<sup>ザンジ</sup>ノ内命<sup>イノチ</sup>ハ」助<sup>タスクル</sup>ト云<sup>フ</sup>(ヒバ、是ハ不叶<sup>カナハズ</sup>トヤ思ヒケン、散々<sup>サンザン</sup>ニ逃失<sup>ニゲウセ</sup>ケリ。

夫<sup>ソレ</sup>ヨリ弥三郎、又、小風呂敷<sup>コ風呂敷</sup>ヲ肩<sup>カタ</sup>ニ掛<sup>カケ</sup>、大キニ隙<sup>ヒマ</sup>(ヲ)取<sup>トリ</sup>タリ、ト云<sup>フ</sup>(ヒ)テ通<sup>ト</sup>リケルニ、片息<sup>カタイキ</sup>ニ成<sup>ナ</sup>テ臥<sup>フシ</sup>タリケル曲者<sup>クセモノ</sup>、ヤウ<sup>ク</sup>ト起<sup>ヲキ</sup>上<sup>アガ</sup>リ、弥三郎姥<sup>ミヤザウバ</sup>ガ教<sup>オシ</sup>ヒシ笛<sup>フエ</sup>、此時<sup>コト</sup>ナリト腰<sup>コシ</sup>ヨリ出<sup>デ</sup>シ(テ)吹<sup>フキ</sup>ケルニ、狼共<sup>オオカミ</sup>、一疋二疋<sup>イツニ</sup>、集<sup>アツマ</sup>リ、十四五疋<sup>ヨリキタ</sup>寄<sup>ヨ</sup>来<sup>キタ</sup>リ、此内<sup>コノウチ</sup>ニ白狼<sup>ハクヲウ</sup>一疋<sup>イツ</sup>アリ。此賊<sup>コノクサシ</sup>人、弥三郎<sup>ミヤザウ</sup>ニ指<sup>ユビ</sup>サシケレバ、一参<sup>イツサン</sup>ニ追<sup>ツイ</sup>カケタリ。〔獵人<sup>リョウジン</sup>ハ獅子<sup>シシ</sup>ニ犬<sup>イヌ</sup>ヲ掛<sup>カ</sup>ルニ、肉<sup>ニク</sup>ヲ分<sup>ワ</sup>テ喰<sup>ク</sup>スト云<sup>フ</sup>〕事<sup>コト</sup>アレバ、鬼姥<sup>オニババ</sup>モ人<sup>ヒト</sup>ノ死骸<sup>シガハ</sup>・生血<sup>ナマク</sup>ヲ吸<sup>スビ</sup>(ヒ)、肉<sup>ニク</sup>ヲ分<sup>ワ</sup>チ与<sup>ユ</sup>ヒテ、狼<sup>オオカミ</sup>ヲ馴<sup>ナ</sup>(レ)附<sup>ツ</sup>(ケ)シモノナラント云<sup>フ</sup>。

其時<sup>ソノトキ</sup>、漸<sup>ヤダヤ</sup>ク山<sup>ヤマ</sup>ノ神<sup>カミ</sup>ヲ祭<sup>マツリ</sup>シ祠堂<sup>ホクラドウ</sup>アリ。此前<sup>コノマタ</sup>ニ漆木<sup>ウルシノキ</sup>ノ大木<sup>オホキ</sup>アリ。此所<sup>コノトコロ</sup>ニ来<sup>キ</sup>リシニ、数疋<sup>スベキ</sup>ノ狼<sup>オオカミ</sup>ニトリマカレ、無<sup>ナク</sup>レ抱<sup>ヨリドコロ</sup>、漆<sup>ウルシ</sup>ノ木<sup>キ</sup>ニ上<sup>ノボ</sup>リシニ、狼<sup>オオカミ</sup>繼々<sup>ツギツギ</sup>登<sup>ノボ</sup>リケルニ、纔<sup>ワツカ</sup>二一疋<sup>イツ</sup>ノ長<sup>ナガ</sup>(ガ)届<sup>ト</sup>カズシテ下<sup>シ</sup>リケレバ、続<sup>ツ</sup>ヒテ来<sup>キ</sup>リシ山賊<sup>サンゾク</sup>、弥三郎姥<sup>ミヤザウバ</sup>女<sup>メ</sup>(※鬼婆<sup>オニババ</sup>)ニ有<sup>アル</sup>(ヲ)ズンバ叶<sup>ムカヒ</sup>ハジ。迎<sup>ムカヒ</sup>ニ出<sup>デ</sup>テ連<sup>ツ</sup>レ来<sup>キタ</sup>レ、ト云<sup>フ</sup>(ヒ)ケレバ、白狼<sup>ハクヲウ</sup>、逸足<sup>イツソク</sup>ニ駈<sup>カケ</sup>行<sup>ユク</sup>ケル。〔此時<sup>コト</sup>、弥三郎<sup>ミヤザウ</sup>、不思議<sup>フシギ</sup>ナル事<sup>コト</sup>ヲ云<sup>フ</sup>〕ト思<sup>オモ</sup>ヒテ居<sup>イ</sup>タリ。去<sup>サ</sup>レドモ狼<sup>オオカミ</sup>、木<sup>キ</sup>ノ廻<sup>マワ</sup>リヲ離<sup>ハナ</sup>レズ、牙<sup>キバ</sup>ヲナラシテ居<sup>イ</sup>タリケレバ」詮<sup>セン</sup>方<sup>カタ</sup>ナク木<sup>キ</sup>ノ上<sup>ノボ</sup>ニ居<sup>イ</sup>タリ。

程<sup>ハカ</sup>ナク、頭<sup>カシラ</sup>ヲドロニシテ、白髮<sup>ハクハツ</sup>ヲ乱<sup>ミダ</sup>シ、鬼女<sup>キメヨ</sup>ノ如<sup>カ</sup>クノ姥<sup>ウバ</sup>、白狼<sup>ハクヲウ</sup>(ヲ)先<sup>ハ</sup>立<sup>タ</sup>ツテ(※先<sup>ハ</sup>立<sup>タ</sup>てて)来<sup>キ</sup>リ。逸参<sup>イツサン</sup>ニ木<sup>キ</sup>ニ登<sup>ノボ</sup>リ、弥三郎<sup>ミヤザウ</sup>ヲ掴<sup>ツカ</sup>ンデ、引<sup>ヒキ</sup>(キ)下<sup>シ</sup>サント片手<sup>カタテ</sup>ヲ延<sup>ノベ</sup>テ、掴<sup>ツカ</sup>マントセシニ、待<sup>マテ</sup>(チ)マウケタル拔身<sup>ヌキミ</sup>ナレバ、水<sup>ミヅ</sup>モタマラズ腕<sup>ウデ</sup>(ヲ)切<sup>キ</sup>レ、血<sup>チ</sup>ハ吐<sup>ハク</sup>ト走<sup>ハシ</sup>テ、雨<sup>アメ</sup>ノ如<sup>カ</sup>クニ散<sup>サン</sup>乱<sup>ラン</sup>ス。姥<sup>ウバ</sup>モ不<sup>レ</sup>叶<sup>カ</sup>トヤ思ヒケン、下<sup>シ</sup>ニ落<sup>ヲ</sup>ケレバ、狼<sup>オオカミ</sup>、散々<sup>サンザン</sup>ニ逃失<sup>ニゲウセ</sup>、姥女<sup>オニメ</sup>ハ行<sup>ユク</sup>方<sup>カタ</sup>知<sup>シ</sup>レズニ成<sup>ナ</sup>ニケリ。〔人間<sup>ニヒト</sup>ノ慾<sup>ヨク</sup>ニ迷<sup>マヨ</sup>フハ断<sup>ツグ</sup>リナリ。通<sup>ツウ</sup>力<sup>リキ</sup>自在<sup>ジザイ</sup>シ、風<sup>カゼ</sup>ヲ起<sup>オコ</sup>シ、雲<sup>クモ</sup>ヲ起<sup>オコ</sup>シ、魔<sup>マ</sup>行<sup>ギョウ</sup>ヲナス者<sup>モノ</sup>ノ眼<sup>メ</sup>ニサイ、軍<sup>イクサ</sup>用<sup>ヨウ</sup>金<sup>キン</sup>取<sup>トル</sup>集<sup>ツグ</sup>ントノ強慾<sup>カウヨク</sup>ニ目<sup>メ</sup>昧<sup>マク</sup>シ、我<sup>ガ</sup>子<sup>コ</sup>ト知<sup>チ</sup>ラズ腕<sup>ウデ</sup>ヲ切<sup>キ</sup>レシハ、運<sup>ウン</sup>ノ極<sup>キョク</sup>メナルベシトカヤ。〕

夫ヨリ弥三郎、狼一疋モ見ヘザレバ、木ヨリ下リ、家ヲ差テ飯リケル。屋敷ヲ見廻スニ、荒果テ、茅ハ肩ヲ  
 スグ。道ハ人（ノ）通ヒシトハ見ヘズ、犬ノ足跡計リナリ。家ハ破レテ、人ノ住居シ（タル）所トハ見ヘズ。  
 然レドモ、人ノウナリ病ノ声シケレバ、家ノ内ニ案内シ、弥三郎、今日只今帰宿致シタリ、ト高声ニ呼ハリ  
 ケレバ、寢所ニテ母ノ音ト（\*ノ）シテ、

扱々、弥三郎、今、帰シカ。我」今日俄ニ腹痛シ、起ル事不レ叶。戸ザシハナケレバ内ニ入（ル）ベシ、トア  
 レバ、懷中ヨリ火打出シ、火繩ニ火ヲ移シ入（レ）テ、蠟燭ニ火ヲ附、爐火ヲ燒、サシモノアバラ屋、昼ノ  
 如クニシテ、臥床ニ入（リ）テ病ヲ問ニ、先刻ヨリノ腹痛ナレバ余リノ事ニハ非ズ。去レドモ、痛ミ烈シキ故  
 ニ、起ル事不レ叶。汝ガ妾子、武者修行ニ出シ翌年四月八日、母子共ニ死去シタリ。親子共ニマメヤカニシテ  
 対面スベシ」ト思ヒシニ、皆アダゴト、ナリス。何ノ面目ガ有（リ）テカ、顔ヲ会センヤ、ト泪ナガラ宣ヘバ、

（\*弥三郎）望ム所ノ書モ悉ク伝授シテ来リ。近年ノ内ニ幡ヲ揚、大望成就セン事、掌ニアリ。先々御喜

ビ下サルベシ、ト云（ヘ）バ、然（レ）バ予モ起（キ）ントテ、爐ノ辺タニコソハ居タリケルニ、

扱、不思議ノ事ニ候。山神堂ノ前ニテ、鬼ノ腕ヲ切取テ参リタリ、ト腕ヲ投出セバ、母、左ノ手ニ取り、ツ  
 ク／＼ト見テ、是ハ我が腕ナリ、ト云（ヒ）テ袖ハ入ルト見ヘシガ、ハフヲ破テ屋ノ棟ニ飛上リ、

汝、能聞ケ。孫子死テヨリ残念膾ニコタイ、夫ヨリ鬼女トナリ、軍用金ノトリ集ン爲ニ、追剥ヲシテハ路用  
 ノ金ヲトリ、或ハ浦々ノ金持シ者ヨリハサライ取（リ）タル、其時ノ金子、長持ノ中ニアリ。万両ニ足ラザレ  
 ドモ、幡揚ノ用金ニセヨ。魔行ヲ行ヒバ、白山姫（ガ）我が行法ヲ時々妨ケ挫ク。久敷此」国ニ居ル事不レ叶ハ  
 バ、是ヨリ越後国弥彦山ニ住居スルナリ。汝、幡揚セシ時ハ、一方ノ助ケトナラン。是迄ナリ、ト雲ヲ起シ、  
 大風ヲ発シテ飛去リケリ。

扱、夫ヨリモ弥三郎（ハ）、親子ノ顔ヲ合力不レ会カニ別ル、事、ヨク／＼ノ因果ナリ、ト涙ニクレテ居タリシ

ガ、親ノ心尽シヲ見ン、ト納戸ニ入(リ)テ長持ヲ開キ見ルニ、千両箱七ツ、其外、砂金取集メ八千両ノ余有(リ)。天ノ明ルヲマチ「旅装束ノ保ニシテ、村ノ傍輩ノ家々ニヨリ、帰宿ヲコソ知ラセケリ。留主ノ中ニ妻子ノ果タルヲ知ラセルモ有(リ)、年寄ノ母計リニテ屋敷モ荒果タル事ヲ語モアリ。

中ニモ、契約シタル者共寄来リ、家内ヲ掃除シ、振舞ス。珍物ヲ調ヒテシタリケル。誓約ノ衆中ニ金子ヲ出シ、普請ノ(\*ヲ)頼ミケレバ、大勢ニテ世話スル事ナレバ、数日ヲ不経シテ建タリ。造作・敷物迄不日」ニシテ成就シケレバ、農業ノ間、休日ニ寄合、劍術(ノ)修行・軍学ヲ教ヒ、陣取・林戦、山谷ノ備ヒトリ、鳥雲ノ陣ノ立様、兵ノ掛引ノ外他事ナカリケル。一兩年モ過ケレバ、一城ノ主タルノ末孫、一方ノ大将ト成(ル)ベキ士、六十有余人アリ。

残党ヲ召集メ、幡揚セン事ヲ謀レドモ、今悉ク源家(ガ)民ヲ恵ミ、賞罰ヲ明ニシ、貢ヲ少ナクシ、農家ヲ賑ス。風雨和順シテ災ヒナク、耕作「能実ノリ、天ニ殃ヒナク、戦ヒヲ興スベキ時ニアラズ。

是、予ガ愁ル所ナリ。時ヲ待ベシ、ト生死ヲ共ニ同(ジフ)セント誓約セシ者共、一年モ早ク君父ノ仇ヲ報ゼント云(ヘ)ドモ、時至ラザル時、大望(ハ)成就シ難シ。戦ハ勝ヨキニ勝モノナリト劍術・陣法計リ(ヲ)修行セリ。白帝ノ世ニシテ赤帝ノ衰ル時ニ当レル哉。

或時、弥三郎、血痰ヲ(\*ノ)病ヲ受。次第ニ熱氣強ク疲レ、病室ニ臥、医「師ノ功ナクシテ百日ヲ不レ過、遂ニ相果タリ。力ヲ合セシ死憤士共、軍將ニ頼ミシ弥三郎ニ別レタレバ手足ノ置所ナク、大願空シク成(リ)ケレバ喧嘩ニ事寄、村ノ西ニ当テ小高原有(リ)。爰ニ行、刺違ヒ々々、六十余人自害ス。是ヲ一ツ塚ニ埋テ、契約檀卜名付テ今ニ残レリ。「其魂魄、蛇ニ成(リ)タリト云(ヒ)伝(フ)。多ク蛇イタレドモ人ニ仇ヲナサズ」。

弥三郎姥、与板(ノ) 弥左衛門二女房ヲ授(ク) ル事

爰ニ弥三郎(ノ) 母ハ越後国弥彦山ニ栖シテ、狼ヲ使テ雲ヲ起シ、風ヲ発シ、人骸ヲサラツテ山ノ頂キニ置  
(ク)。或ハ山・沢ニ投捨、夜毎々々狼ヲ先立テ歩行ケレバ、海道ノ往来絶タリ。人民ノ苦シム事、大方ナラズ。  
与板ト云(フ) 所ニ、貧窮ニシテ弥左衛門(ガ) 早死シテ、母子計リ暮ラシケルニ、子共、則、親ノ名ヲ続  
デ、弥左衛門トテ同村ノ内ニ奉公シ、母親ヲ養ケルニ、孝行ニシテ」内ニ皈リテハ、主用ノ一日ノ仕業ヲ物語  
リ、珍シキ賄アレバ、我ハ不レ食シテ母ヒ与ヒ、酒ハ我ハ不レ好ドモ、親ニハ好酒ヲ求メテ、絶ス事ナシ。人ト  
争フ事ナシ。賭ヲ勝負ヲセズ、寝起ヲ共ニシテ、親ノ心ニ違フ事ナシ。冬ハ敷物ヲアタ、メ、夏ハ枕ヲ扇ヒデ、  
愛ヲトリ、氣ニ逆フ事ナシ。働ハ衆人ニ越テ、休日、我家ニ皈リテハ、屋敷ノ畑ニ、親ノ好物ヲ作り、水ヲ  
汲、真木ヲ割テ不自由ナキ」ヤウニシテ、養ヒケル。主人ノ勤メハ一日モカク事ナシ。給恩モ余人ヨリモ増シ  
テ貰ヒケレドモ困窮也。仁者ハ不レ富ト云(フ) ハ此事カ。

時ニ、母、何トナク不例ニシテ病氣ツキケレバ、近隣ノ医ノ薬用スレドモ功ナシ。甚ダ心ヲ苦シメ(テ) 居  
タリシガ、新潟ニ名医有(リ) ト教ヒラレ、即刻、新潟ヘ行、容子ヲ委ク語リ、薬ヲ貰(ヒ) テ飛ガ如クニ家  
ニ皈リ、薬用セシニ少シ快キ方ニテ、主人ノ勤メテ仕廻(\*勤めを終えてから、の意)、夫ヨリ薬取ニ新潟ヘ  
往(ク) 事ナレバ、夜計リ戻シニ、途中ニテ白髪ノ七十計リノ姥ニ会、是コソ弥彦ノ弥三郎婆々ナルカ、ト氣味悪  
クナリシカドモ詮方ナク、顔青ザメテ往シニ、婆々ガ曰(ク)、

御身ハドコイ通ルト問レ、与板ヘ往(ク) 者ナリト云(フ)。予モ与板(ノ) 近所ノ者ナルガ、与板迄一所  
ニ參ルベシト云(フ)。年寄ナレドモ、我ニツヅケト杖ヲ引(キ) テ、腰(ヲ) カメナガラ、足早ニテ漸追付、  
語々行(キ) ケルニ、

此頃、殊ノ外、狼ガ荒ルト聞シガ怖シキ事ナリト云(ヘ) バ、姥ガ、予ト一ツニ歩行バ狼ニ氣遣事ナシト云(ヘ)

バ、猶々<sup>キミワレクドウドウ</sup>氣味惡同道シテ、我が家<sup>ヤ</sup>迄<sup>カイ</sup>歸リケレバ、姥<sup>ワカ</sup>モ分レテ往ケリ。以前<sup>イゼン</sup>ヨリ早<sup>スギ</sup>一刻モ過ザルニ歸ル。母モ歸<sup>ハヤ</sup>リノ早キ<sup>ヨロコ</sup>ヲ喜ビ、又、三日程<sup>ニキガタ</sup>スギ、新渴<sup>ユキ</sup>ヘ往、藥ヲ取テ歸リシニ、姥、先日<sup>アイ</sup>会シ<sup>デアワ</sup>所ニテ出合セ、与板<sup>ワカイ</sup>ノ若者、今夜<sup>コヨイ</sup>モ同道スベシト云(フ)。

姥サマ、何用<sup>ナニヨウ</sup>ニテ又御座<sup>ゴザ</sup>ラレシト云(ヘ)バ、新渴<sup>ニキガタ</sup>ヘ娘ヲツカハシ置シガ、錢<sup>ゼニ</sup>貳<sup>ニモ</sup>参<sup>サ</sup>リタリ。イツモ夜ニ計リナルト語リ<sup>カク</sup>与板<sup>イゼン</sup>迄、已前<sup>イゼン</sup>ノ如ク家ノ前ニテ別<sup>ワカ</sup>レタリ。斯<sup>カク</sup>スル事三度ニ及ビ、姥、家ニ立<sup>タチ</sup>寄<sup>ヨリ</sup>、茶<sup>チャ</sup>ヲ出シケレバ、母ノ病氣イカニヤト云(ヘ)バ、容子<sup>キ</sup>ヲ聞、予、藥ヲ進<sup>マイラ</sup>スベシト練<sup>ネリ</sup>藥<sup>ヤク</sup>(ヲ)小茶碗<sup>コチャワン</sup>ニ一ツ程<sup>ク</sup>呉レ、我ハ(※)「あなたは」の意。米沢方言)殊<sup>ヘ</sup>ノ外、親ニ孝行成<sup>ネイ</sup>(ル)者ナリ。女房<sup>ニヤバウ</sup>ヲ列<sup>ツレ</sup>來<sup>イ</sup>ルベシト云(フ)。

貧<sup>ヒン</sup>窮<sup>キウ</sup>ノ者、奉公<sup>ハウコウ</sup>シテ親<sup>フヤ</sup>一人サイ養<sup>ヘ</sup>ビ兼<sup>カス</sup>ル<sup>ネイ</sup>躰<sup>テ</sup>ニテ、ドウシテ嫁<sup>ヨメ</sup>婦<sup>メ</sup>有<sup>イ</sup>(ラ)ント云バ、予ハ弥<sup>ヤ</sup>彦<sup>ヒコ</sup>ノ姥<sup>ワカ</sup>ナリ。汝ガ親<sup>フヤ</sup>孝行<sup>ガン</sup>ヲ感<sup>カン</sup>ジ(テ)送<sup>ズ</sup>リタリ。不<sup>ズ</sup>レ<sup>レ</sup>苦<sup>ク</sup>、來月<sup>ズクルシカ</sup>ノ廿八日ノ夜、連<sup>サワ</sup>來<sup>モシ</sup>ル程<sup>キトサク</sup>ニ、餅<sup>モ</sup>ニテモ搗<sup>ツキ</sup>、一類<sup>ネリヤク</sup>共<sup>ノ</sup>(ヲ)招<sup>マモ</sup>テ置<sup>キ</sup>(ク)ベシ。大風吹<sup>サワ</sup>(ク)程<sup>モシ</sup>ニ、必ズ其時、騒<sup>サワ</sup>グ事ナカレ。若<sup>モシ</sup>、氣<sup>キ</sup>遠<sup>エ</sup>セシカバ、其練<sup>ネリヤク</sup>藥<sup>ヤク</sup>ヲ母ニ吞<sup>ノマ</sup>セタ殘<sup>サマ</sup>リ(ヲ)可<sup>カ</sup>吞<sup>ノマ</sup>、ト云(ヒ)テ立出<sup>ユキカタ</sup>(デ)ケルガ、行方<sup>ユキカタ</sup>知<sup>チ</sup>レズニナリニケリ。此藥<sup>ゼンクハイ</sup>ノ香<sup>コウ</sup>氣<sup>キ</sup>、甚<sup>ク</sup>シ。一ト間<sup>ヘデ</sup>隔<sup>ヘ</sup>テモ匂<sup>ニホ</sup>ヒアリ。母親<sup>ハハ</sup>ニ吞<sup>ノマ</sup>(マ)セケレバ即席<sup>ソクセキ</sup>ニ氣<sup>キ</sup>モ開<sup>ヒラ</sup>ケ、七日ニナラズシテ全快<sup>ゼンクハイ</sup>セリ。

へ是ハ、近江ノ日野玄三ガ感<sup>カン</sup>應<sup>オウ</sup>丸<sup>マル</sup>ニテモ、サライ來<sup>イ</sup>ルモノナルベシ。

誠<sup>マコト</sup>ニ、孝ハ天地<sup>チ</sup>ニノツトリ、鬼神<sup>キジン</sup>モ孝ハ感<sup>カン</sup>格<sup>カク</sup>スル者ナラン。人ノ身<sup>ミ</sup>トシテハ忠<sup>チュウ</sup>孝<sup>コウ</sup>ハ離<sup>ハナ</sup>レベキニアラズ。可<sup>カ</sup>レ<sup>レ</sup>敬<sup>ケイ</sup>、可<sup>カ</sup>レ<sup>レ</sup>尊<sup>ソウ</sup>ノ第一也。

爰<sup>セツツクニヲ</sup>ニ撰津国大坂<sup>ミワヤ</sup>ニ、三輪屋久右エ門<sup>ミツツクニヲ</sup>迎<sup>サカ</sup>、一二ト云(ハ)レシ分限<sup>ブンゲン</sup>ノ町人有<sup>リ</sup>(リ)。格式<sup>カクシキ</sup>モ免<sup>ユル</sup>サレ有<sup>ユウ</sup>徳<sup>トク</sup>ノ富者<sup>フナシヤ</sup>ナリ。此娘<sup>コノイメ</sup>ニヲエツ迎<sup>ミツ</sup>、十六歳<sup>ロウシキ</sup>ニ成<sup>ナリ</sup>(ル)容顏<sup>ヨウガン</sup>ウルワシク美麗<sup>ビレイ</sup>ノ娘ナリ。京都<sup>キョト</sup>ノ町人、墨<sup>スミ</sup>ノ倉清<sup>クラキヨ</sup>右エ門<sup>ミナモト</sup>トテ名<sup>ナ</sup>(ノ)有<sup>リ</sup>(ル)分限<sup>ブンゲン</sup>、是モ録<sup>ロク</sup>式<sup>シキ</sup>(※)「禄識<sup>ロクシキ</sup>」か)ノアリ富貴<sup>フキ</sup>ナル町人ナリシガ、媒<sup>ナカ</sup>妁<sup>ダク</sup>有<sup>リ</sup>(リ)テ縁<sup>エン</sup>定<sup>テイ</sup>シケリ。婚<sup>コン</sup>姻<sup>イン</sup>ニ十八日ニ定<sup>サダメ</sup>リテ、舟<sup>フネ</sup>ニテハ氣<sup>キ</sup>ヅカハシト乗物<sup>ノリモツ</sup>ニテ侍女<sup>コノメ</sup>五<sup>イ</sup>六<sup>ロク</sup>人<sup>ニヒ</sup>附<sup>ツキ</sup>添<sup>ソビ</sup>、男女<sup>オトメ</sup>三四<sup>ニ</sup>拾<sup>シウ</sup>人<sup>ニヒ</sup>ノ供<sup>トモ</sup>廻<sup>マワ</sup>ニテ、道<sup>ミチ</sup>中<sup>ナカ</sup>賑<sup>ニギンク</sup>々<sup>ヨソナ</sup>敷<sup>フシ</sup>粧<sup>シヤウ</sup>

ヒ飾リ嫁入シケルガ、男山ノ禁へ至リシニ愛宕山ニ一村ノ雲起立(チ)ケルガ、大風ハ「ゲシクシテ、電交リノ雨フリ、先ニ立(チ)シ人モ見分ラ(レ)ズ、忘然タル時ニ、暴風シキリニシ、女・乗物共、何国トモナク吹飛レケル。柔弱ノ女共、死(ス)ル者モアリ。魔行ノナス業ナレバ、程ナク晴天ニナリケルガ、半死半生ノ者、多カリケル。泣サケビケレドモ、詮方ナク、皆介抱シテ、大坂ヘコソハ歸リケリ。

越後ノ国ニハ、弥彦ノ姥ノ教ヒノ通り、廿八日ニモ成(リ)ケレバ、餅ヲ搗テ、一家七八人呼テ「大鉢ニ五升餅一重、傍ニ小豆ヲ添テ梅干七ツ、蓬ノ箸ヲ入(レ)テ、屋ノ棟ニ捧上テ待居タル所ニ、日ノ暮迄何ノ事モナカリシニ、夜半ノ頃、大風吹(キ)テ家ヲ飛(バ)ス程ノ大嵐ナリ。庭上ニ大石ノ落タル如クノ音シケレバ、程ナク晴渡リケレバ、外面ニ出テ見レバ、誠ニ約束ノ通り、二八(※十六歳)計リト見ヘテ美シキ女(ノ)名ノ知レヌ衣服ヲ着テ居タリシガ、片息ニ成テ玉」ノ緒ノ切ル、計リナルヲ家ニ抱入、姥ニ貫ヒシ薬ヲ、齒ノ喰メタルニ扇子ノ元ヲ入(レ)テ口ヲ開テ吹込ケレバ、漸々ニ息ヲ吹出シ人心地ゾツキニケリ。

爰ハ何ト云(フ)所ゾト問バ、越後ノ国ナリト云(ヘ)バ、大風ニサラワレタレバ命アルベキ身ニモアラズ。扱、不思議ノ縁ニテ御介抱ニ預リ活命シタリト泪ナガラニ語リシガ、是、仏神ノ引(キ)合(ハセ)ナルベシト感心シ、夫婦ノ縁ヲ結(ムスビ)ケリ。夫婦中睦シク、老母ニ仕ヒシトナリ。

此事、国中ニ隠レナク、与板ノ弥左エ門ト云(フ)者、美シキ女房ヲ弥彦ノ婆々ニ貫ヒシト沙汰シケリ。翌春、柏崎ノ船(ニ)米ヲ積、兵庫ノ北風庄右エ門(ノ)宿ニテ、年々登リシニ船頭(ノ)孝蔵ト云(フ)者、越後ニ不思議ナル事アリ。与板ト云(フ)所ニ、弥左エ門、幼名比平ト云(フ)。弥彦ノ姥ヨリ女房(ヲ)授リシ事共、巨細ニ「語リケレバ、庄右エ門ハ、大坂ノ三輪屋久右エ門ガ娘(ノ)男山ニテサラワレタル事ヲ咄シケレバ、何ニシテモ不思議ノ珍事ナリト咄会リ、三輪ガ手先ノ者、酒米仕入ニ北風ガ所ニ泊リ居タリケレバ、早々、此事、久左エ門ニ告タリシニ、始終ヲ聞テ、セメテ娘ガ死骸計リモ見付(ケ)出シ、葬ラント尋レ共、今ニ斯

ト云(フ)事モ知レズ。万ニ一ツモ助命有(ル)ベキニ有ラズ。若ヤ<sup>モシ</sup>ト思フハ甚ダ迷フタル事ナレドモ、実否<sup>ジツフ</sup>ヲ見届度者也ト云(ヘ)バ、年寄ノ番頭清右エ門、越後へ下リ見届参ルベシ、ト云(ヒ)ケレバ、然ラバ大儀<sup>タイギ</sup>ナガラ下ルベシ、ト申付(ケ)シカバ、太物<sup>フトモノ</sup>(＊綿・麻の織物)ヲ新渴<sup>ニホグ</sup>へ下シ、其船<sup>フネ</sup>ニ乘リ船問屋ニ着キ、初メテノ事ナレバ少々持参致シタリ。

注文ヲ請テ来年ヨリ沢山ニ下シ度(キ)存含<sup>ゾンジツク</sup>ミニテ、罷下<sup>マカ</sup>リ候間、不案内ノ事ナレバ、好キ棚々<sup>ヨクナダナ</sup>へ御差図下<sup>ヲサスツ</sup>サレ、外<sup>ホカ</sup>ニ一人、然ベキ仁<sup>ニ</sup>、御借下サレタシト云(ヘ)バ、夫レハ安キ御用ナリト棚々<sup>シヨメン</sup>へ書面数通認メ、長岡<sup>ナガワカ</sup>ニ一條、小千谷<sup>イチチヤ</sup>、与板<sup>ヨイタ</sup>、水原<sup>スイハラ</sup>、亀田<sup>カメダ</sup>、新発田村<sup>シハタ</sup>、上江島<sup>カミエジマ</sup>ノ太物<sup>フトモノ</sup>(ヲ)小サク切テ、反物<sup>タンブ</sup>ニ張付<sup>ハリツケ</sup>、諸品<sup>シヨホン</sup>ノツケ計<sup>バカ</sup>リヲ以テ、案内ノ者ト兩人ニテ廻リケル。

伊夜彦大明神ハ、越後ノ国ノ一宮ナレバ、是ヒ参詣シケルニ、案内ノ者申(シ)ケルハ、此弥彦山ニ弥三郎<sup>ヤヒコヤマ</sup>姥登云<sup>ウバトイフ</sup>「鬼姥<sup>ゴババ</sup>、住居スルト申(ス)事ニ候。夫ニ付(キ)、不思議ナル事アリ。与板<sup>ヨイタ</sup>ノ比平ト云(フ)者、殊<sup>コト</sup>ノ外<sup>ホカ</sup>、親ニ孝行ナル者ニテ、弥彦ノ姥ニ女房ヲ授リタリト、去年ノ事ナリト云(ヒ)ケレバ、ソレハ珍シキ事也。其所<sup>ユキ</sup>へ案内シ給ヒト云(ヘ)バ、私モ其婦ヲ見度<sup>ミナ</sup>(ク)思ヒ共、今ニ見ズ。能折柄ナリト兩人打連<sup>ツレ</sup>、与板ヲサシテ往ニケリ。

其家ヲ尋テ見ルニ、寔ニ貧家ト見ヘテ破生草<sup>ハニフ</sup>ノ住<sup>イ</sup>居ナリ。案内ノ者、新渴<sup>ニホグ</sup>ノ島物売ナルガ、茶ヲ一ツ被下<sup>サレクダ</sup>度シ。休度候ガ一寸御家ヲ御借下サレタシト云(ヒ)テ内へ入(リ)シニ、母ト女房計リ居リシガ、定テ此女<sup>サダメ</sup>ナルベシト、扱<sup>サテ</sup>、綴<sup>ツヅ</sup>レタル衣服ヲ着タレドモ、容顔ウズ高シテ美婦ナリト見トレテ居タリシガ、サアく是ヘ<sup>ハ</sup>ト華呉座敷<sup>ハナゴザシキ</sup>テ、茶<sup>チャ</sup>ノ出花<sup>デバナ</sup>(ヲ)上ゲマシヤウト炉<sup>ロ</sup>ノ火ヲ焼<sup>タキ</sup>、茶釜ヲ掛テ涌シタリ。

親ニ孝慈アル<sup>コウジ</sup>者ハ、人ニモ愛情格別ナリ。御客モ入ラセ玉ヘトイワレテ、大坂ノ番頭<sup>バントウ</sup>、無調法ナガラ御免<sup>ゴメン</sup>下サレト内ニ入(リ)テ、其婦ノ顔<sup>カネ</sup>(ヲ)ツクくト見テ、御前ハ、オエツ様ニテハナキカ、ト云(ヘ)バ、



我ハ（＊あなたは、の意。米沢方言）清右エ門ニテハナカリシヤ、ト余リノ事ニテ、物ヲモイワレズ、泪計リ  
 ニテ居タリシガ、良有（リ）テ、爰ニサラワレ来テ活命シタル事ヲ語レバ、清右エ門、二方ノ愁傷限りナク案事  
 玉ヘシニ、兵庫ニテ「柏崎ノ船頭ノ咄シヲ聞、千二モ一ツモ、ト云（フ）事ニテ見届ノミ（トテ）是迄下リシ、  
 ト委細ニ語り、喜悦ノ程、云（フ）計リナシ」。

清右エ門ガ云（ク）、弥左エ門様ニ御目ニ掛度旨（＊お目にかかりたいと）申（シ）演ケレバ、旦那ハ迎ヲ遣  
 シケレバ、早速、家ニ帰リシガ、是モ綴タル膝半ナルヲ着シケレドモ、賤シカラヌ人相ナリ。天ノ徳ヲ得ル者  
 ハ其骨柄、自然ト其器量備ル者ナランカ。比平ト清右エ門、対面ノ上「始終不レ残語りケリ」。

或時、清右エ門、オエツニ向テ申ケルハ、御前サマハ国元ヘ御歸リ遊サレテ然ルベシ、ト云（ヒ）ケレバ、

私ハ（＊次の文の主語、縁ハ仏神ノ庇護ナルベケレバ、貧福モ天神ノ定メ玉フ所ナリ。爰ニテ果ベキナレドモ、

何卒一度ハ両親ニ逢ヒ奉リ度思フナリ、ト云ワレシカバ、清右エ門、懷中ヨリ金子百両（ヲ）取出シ、身代ツ

グノイ御不自由ナキ様ニナサルベシ。太物（ヲ）「下セシ金子、不レ残相送候間、御普請ナサレ候様ニ、御心掛

可レ有」之、ト新渴ニテ商シタル数千両ノ金ヲ番頭出（ダシ）テ、万端、此者ノ差図ニテ家ヲ建、土蔵・文庫ヲ

作り、立普請、悉ク成就ス。

弥左エ門ハ夢ニ夢見シ如ク也。母親ニ「仕ル下女・半女ヲ抱ヒ、親類ノ者（ヲ）後見ニ頼ミテ家ヲ守ラセ、

弥左エ門夫婦・番頭共ニ駕籠ニテ都合二十余人ノ旅行ノ粧ニテ」大坂サシテ登リケル。大坂ニテハ番頭下リテ

今ニ至テモ音信曾テナシ。三周忌ニ相当リケレバ親類共集會シ、法事ヲ執行ヒケル。

（船便ニ（テ）番頭（ノ）書状（ヲ）登セケレドモ不レ行届」。道中ニテ商用ト見テ、上リ下リ相庭（＊相

場）ヲ見度（ク）開封シタル者（＊モノ）ナラン。此頃、定飛脚・島屋・京屋抔ト云（フ）者、ナカリシ

ト見ヘタリ。」

番頭清右エ門、大津ヨリ駈拔<sup>カケヌ</sup>ント夜通<sup>ヨドヲ</sup>シニ早駕籠<sup>ハヤカゴ</sup>ニテ大坂ニ到着<sup>タウチャクイタ</sup>致シケレバ、親類共寄会<sup>ヨリアイ</sup>タル法事<sup>ホウジ</sup>ノ日ニ当<sup>アタ</sup>レリ。旦那久右エ門（＊オエツの父。三輪屋）親子ニ対面<sup>タイメン</sup>シテ、始終<sup>シジウ</sup>ノ事ヲ委ク語り、オエツ様（ハ）夫婦共<sup>フウフ</sup>ニ大津迄同道<sup>ドウドウ</sup>ニテ参<sup>マイ</sup>リ、私ハ夜通<sup>ヨドホ</sup>（シ）ニシテ迎<sup>ムカイ</sup>ノ者ヲモ出サント急ギテ帰<sup>イダ</sup>リシ、ト語りケレバ、両親ノ喜悅<sup>キエツ</sup>、言語<sup>ゴンゴ</sup>ニノベ難<sup>ガタ</sup>シ。家内ノ下々ニ至ル迄、俄<sup>ニハカワライ</sup>ニ笑<sup>モヨブ</sup>ヲ催<sup>ヨロコ</sup>シ、喜<sup>カギ</sup>「ブ事限<sup>カギ</sup>リナシ。親類ハ、我モ／＼ト迎<sup>ムカイ</sup>ニ出タリケル。法事ノ料理<sup>ホウジ</sup>（ヲ）引替<sup>ヒキカヘ</sup>テ、魚鳥ノ料理<sup>ギョトウ</sup>ト変<sup>ヘン</sup>ジタリ。

爰ニゾ拍子ナキハ、拜寺<sup>ハイジ</sup>・伴僧<sup>バンソウ</sup>・諸寺院<sup>シヨジキン</sup>（ノ）方ナリ。折角<sup>セツカク</sup>取繕<sup>トリツクロ</sup>ヒタル花<sup>ハナ</sup>や仏壇<sup>ブツダン</sup>饌<sup>シカザ</sup>立<sup>タテ</sup>（テ）タル供物等<sup>クモツトウ</sup>（ヲ）イマ／＼シイト過<sup>グハ</sup>ル々々ト引<sup>キ</sup>帰<sup>カイ</sup>セバ、布施<sup>フセ</sup>ニモナラス、丸<sup>マル</sup>首<sup>アタマ</sup>ヲカクバカリ。扱<sup>サテ</sup>々、手持<sup>テモチ</sup>無沙汰<sup>ムサタ</sup>ノ行狀<sup>リョウサマ</sup>ナリ。祝<sup>イハヒ</sup>ノ座敷<sup>ザシキ</sup>ニ居ルベキヤウナケレバ、暇<sup>イマ</sup>ヲ乞<sup>コ</sup>ハズ」早々ニ我寺<sup>エテラ</sup>（ヲ）サシテ鼠<sup>ネズミ</sup>ノ逃<sup>ニゲ</sup>ル如クニテ帰<sup>キ</sup>（リ）シハ、前代未聞<sup>ゼンダイイミモ</sup>ノ事共ナリ。

遠見<sup>トホミ</sup>ノ者（ガ）程近<sup>チカシ</sup>シト注進<sup>チュシン</sup>シケレバ、門際<sup>モンキワ</sup>迄駕籠<sup>カゴ</sup>ニ乗来<sup>ノリ</sup>リ、弥左衛門夫婦<sup>ミサエモウフ</sup>（ガ）歩行<sup>ホコウ</sup>シテ進<sup>ス</sup>ミケレバ、案内<sup>アンナイ</sup>ノ者有<sup>アリ</sup>（リ）テ、玄関<sup>ゲンクワン</sup>ヨリ入<sup>イ</sup>ラレタリ。オエツハ、女子共ノ案内<sup>（ママ）</sup>ニテ、中ノ口<sup>ナカノクチ</sup>チヨリ入<sup>イ</sup>リニケリ。初テノ見参<sup>ゲンサン</sup>ナリ、ト上段<sup>ジョウダン</sup>ノ上座<sup>ジョウザ</sup>ニコソハ請<sup>シヤウ</sup>ジケリ。ヲエツハ、両親<sup>リョウシン</sup>ニ対面<sup>タイメン</sup>シ、嬉<sup>ウレ</sup>シキニモ涙<sup>ナミダ</sup>先立<sup>サキダツ</sup>。言葉<sup>コトバ</sup>モ更<sup>イデ</sup>ニ出ザリ」ケリ。両親ハ今日迄去シタリト思<sup>オモ</sup>ヒシニ、娘<sup>ムスメ</sup>（＊ニ）三年ニシテ逢<sup>ア</sup>フ事ナレバ、蘇生<sup>ソウセイ</sup>シタリト云フモヲロカナリ。唐土<sup>モロコシ</sup>・我朝<sup>ワガアサ</sup>ニ聞<sup>キ</sup>伝<sup>ツタ</sup>ヘザル事共ナリ。夢<sup>ユメ</sup>ウツ、トモ分<sup>ワカ</sup>チ兼<sup>カネ</sup>タル喜祝<sup>キエツ</sup>事ハ限<sup>カギ</sup>リナシ。

扱<sup>サ</sup>テ、久右エ門（ハ）座席<sup>ザセキ</sup>ニ弥左エ門ヲ呼<sup>ヨ</sup>デ面談<sup>メンダン</sup>シ、親<sup>シン</sup>子<sup>コ</sup>・兄弟<sup>ケイテイ</sup>・親類<sup>シンライ</sup>ノ名乗<sup>ナノリ</sup>ノ益<sup>サカ</sup>シテ酒<sup>サケ</sup>ヲ汲<sup>クミ</sup>カハシ、三国<sup>サングニ</sup>一<sup>イチ</sup>ノ祝儀<sup>シウギ</sup>トハ是等ノ事ヲヤ云フベキ。七日七夜モキラズノ祝承<sup>シユクシヤウ</sup>有<sup>アル</sup>（リ）シモ断<sup>コトハ</sup>リナリ。」

親類<sup>シンライ</sup>・縁者<sup>エンジャ</sup>へ（ノ）振舞<sup>フルマユ</sup>ニテ、暇<sup>イマ</sup>ノ日トテモナカリシニ、不<sup>フ</sup>思<sup>シ</sup>不<sup>フ</sup>知<sup>チ</sup>、半年<sup>ハネン</sup>ヲ過<sup>ス</sup>シタリ。国ノ母モ何程<sup>ナニホド</sup>カ案事<sup>アンジ</sup>玉<sup>タマ</sup>ヘル筈<sup>ハツ</sup>ナラン、ト帰<sup>キ</sup>國<sup>クニ</sup>ヲ願<sup>ネガ</sup>ヒケレバ、番頭清右エ門（ニ）申附<sup>モンブツ</sup>（ケ）、万<sup>マン</sup>事<sup>ジ</sup>不<sup>フ</sup>自由<sup>ジユウ</sup>ナキヤウニ取計<sup>トリケイ</sup>フベシ、ト申付<sup>モンフ</sup>（ケ）ラレシニヨリ、金子<sup>キンゴ</sup>数万<sup>スマン</sup>両<sup>リョウ</sup>ニ、家財<sup>カサイ</sup>ノ品<sup>シナ</sup>（ヲ）トリ調<sup>ト</sup>ヒ、船<sup>フネ</sup>二艘<sup>ニフネ</sup>ニシテ下<sup>（ママ）</sup>シケル。弥左エ門夫婦<sup>フウフ</sup>ハ、

駕籠ニテ越後国与板迄、供勢数多ニテ送レタリ。

是ヨリ」大坂屋弥左エ門ト改名シ、

「町家ノ内ハ弥左エ門ト名ノリ、隠居シテ与板ノ領主ノ老リ職ヲ勤(メ)、八百石(ヲ)領シテ、三輪比平

ト代々成(ル)。

是ヨリ大坂屋(ハ)マス、繁昌シ、夜彦ノ弥三郎姥ガ神通ナリ、ト弥左衛門(ハ)尊敬シテ、伊夜日子大明神ノ社内ニ宮殿(ヘクウデン)ヲ建立致シテ、

### 。妙陀羅天

ト祭り奉ル。不生不滅ノ神靈ナリ。神ニ祭りテヨリ、人民ニ仇ヲナス事ナシト云云。

供物ハ、白餅ノ傍ニ煮小豆ヲ添(ヘ)、梅干ヲ置(キ)、蓬ノ箸ヲ備ヒ上テ祭ルベシ、トナリ。

奥州、今ハ羽州置賜郡ニ源ノ義家公ノ陣場、安部貞任ノ古城・陣所ノ旧跡、悉ク今エアリ。九牛ノ一毛ヲ揚、屋代郷一本柳ニ渡会弥三郎(ノ)屋敷ノ古跡残レリ。今ハ畑ニ成(リ)、其傍仁宮殿(ヘクウデン)アリ。

### 。妙陀羅天

ト神号ヲ拜シ奉ル。数曆ヲ経テ破レ、新ニ奉再建、神助ヲ仰グ。神ハ、人ノ敬フニ依テ威ヲ増シ、人ハ神ノ德ニ依テ運ヲ添フト貞永ノ式目ニ出タリ、ト陵夷ヲ致サズト有(リ)。誠ニ尊敬スベキノ第一ナリ。宝作円満シ、国家泰平豊饒ヲ祈リ、大君ノ御代ニ万歳ヲ唱ヒ奉リケリ。

抑、此妙陀羅天ト申シ奉ルハ、不生不滅ノ神靈ニシテ、奇特アル事、今ニ不絶。寿命長延ヲ祈ル。咳氣ヲ

祈ル。<sup>(マ)</sup>俗ニシテハ、シリシヤブキト云<sup>(マ)</sup>（フ）。縁遠ノ男女ハ此神ヲ祈ルベシ。又ハ、恋ヲ祈ルニ奇特アル。皆人ノ知ル給フ所ナリ。

### 屋代神社靈驗記 終

以下、補足資料を四点あげる。

- 1、宝光院（西蒲原郡弥彦村弥彦）の観光案内パンフに掲載された江戸後期と思われる略縁起（影印）を翻刻した。句読点を補い、版木の状態によると思われる解読不能の部分空白にした。
- 2、長沼太沖『牛の誕』続篇第一卷（米沢市立図書館所蔵）と同三三卷にほぼ同じ話が収録されている。また、竹田市太郎『西置賜郡志』（西置賜郡社会科研究会、一九五四年）に『朱の誕』の翻刻がある。本稿では、両本（続篇第一卷）を校合しあらたに本文を作成した。句読点、段落などをつけ、適宜、表記を変えた。
- 3、『牛の誕』卷三十二に2と同じ話があり、そのあとに記された話を翻刻した。翻刻の処置は2の場合と同じ。
- 4、宝光院境内に建立されている石碑の文章を翻刻した。句読点をつけ、行替えを／で示した。
- 5、「文殊の里・昔むかし」（発行年月日等不明）に掲載された「おっかな橋（船橋）」を引載した。

### 補足資料 1

越後州 弥彦山妙多羅天略縁起

夫、妙多羅天と者、当社大明神、此地江降臨以後數百年をへて、弥三郎と号して一人の農夫有。其母天性<sup>ケンドンハライツ</sup>慳貪放逸なる事、人に過なり。齡<sup>ヨハ</sup>ひ六十斗<sup>ムツジ</sup>の頃おひ忽ち其形を變じ既に惡鬼と成にけり。老母、弥三郎夫婦に語て云、「我、平生願ひ有。閨<sup>ネヤ</sup>に入る後、汝等伺<sup>ウカ</sup>ひ見る事なかれ。我深眠を好む。一歳三百六十日の中、唯七月十六日而已一日醒<sup>サムル</sup>」云々。夫婦慎<sup>ツウダク</sup>て応諾。其後在々所々に飛行して新死の尸を抓取事其數をしらず。世人更に何者の所為と云事をしる者なし。或時、弥三郎、山野に出て獵<sup>リヤウ</sup>既に夜陰に及び、帰らんとす。鬼母、弥三郎を捕ふ。弥三郎、母といふことをしらず、鎌<sup>カ</sup>を以て右の腕を切落す。鬼母、其夜家に帰り、孫弥治郎を□取喰はす。孫、驚泣事急なり。則、弥治郎の母、何事の出来れりと立騒ぎければ、鬼母顯れぬと思ひ、夫より家を出退て再び来ることなし。其後二百余年過て当山座主台の阿闍梨に遭ひ、秘密の印璽<sup>インシ</sup>を受、名を妙多羅天と改む。是より益々飛行自在にして、当社大明神の使者と成て、邪見無慙<sup>ザン</sup>の惡人をば、貴賤<sup>イラバ</sup>を撰<sup>イラバ</sup>ず男女を問はず、新に死する日には霹靂たる雷を發、暴風甚雨して、尸を抓取持来て、当山の滝沢死出の木に掛置、無上惡人の戒とす。故に夫より別て八月十三日より十五日まで、近郷遠境の道俗男女、当社江參詣して現世安穩後望善所を祈奉る。且亦、妙多羅天の像を礼拝し種々の供物を備へ隣遠離の祈誓を致せり。其に付、諸氏所作の伝記に見へたり。此妙多羅天、常に当山の嶺に居し、或は佐州の北山、能登の石山、加賀の白山、越中の立山、信州の浅間山などに住すと云ひ伝へ侍る者也。

西蒲原郡弥彦 紫雲山 宝光院

# 〔付記〕

宝光院（西蒲原郡弥彦村弥彦）発行の案内パンフレットに掲載された略縁起原文の小さな写真による。文字がよく見えず解説できないところがあるが参考のため掲げる。翻刻にあたり、読みやすくするため句読点を補

い、旧字体の漢字を通行の新字体にあらためた。いずれ原資料を見いだし正確な翻刻を期したい。

## 補足資料 2

### 妙多羅天

昔、越後一州、夜、人の行方知らずなることあり。神隠しと云ふものにや、と云ひ合ふ。時に古志郡はすがた村に弥三郎と云ふ者あり。綱繩を水に浮かべ鳥を捕るを業とす。母に孝行にて妻をも迎ひす。のち、その母、病んで一室に籠もり、人に逢はざること多年なり。

弥三郎、ある夜、常の如く、もろなほ綱繩を流し鳥の来たるを待ちたるに、怪しき風、颯と吹きおろし、何やらん、天狗とも云ふべきもの、弥三郎、大胆不敵の若者なりければ、腰に有る所の鎌を持ちなどし、身をひそめて狙ひ居りけるに、彼の怪しきもの、鷹の如く飛び来たり、弥三郎をつかみ、虚空に飛揚しけり。弥三郎、持ちたる鎌にて、掴みたる手を切れば、其の身は田の中に落ちたり。火を照してこれを<sup>(ママ)</sup>見れば、人の腕に似て全く人にもあらず。これなん鬼の腕にや、と身の毛もよだちければ、走りて家に帰る。

その母、一室に在りて「あら苦しや」といふ声しければ、弥三郎、往きて「今夜は別して痛み給ふに、さてふしぎなる事のはべる。今夜、かくかくの事あり」と云へば、「その腕、見む」とぞ。「おそろしきものなれば、女の見るべきものにあらず」と制すれども、聞かず。ついにその腕を見すれば、

「汝の母を喰ひたる報ひにてかかる危ふき目に逢ひぬ。汝も喰ふべけれども、母に孝也。多年 養はれたる恩あれば、汝は赦すなり」

とて、腕を携へ、窓を蹴破りて飛び行きけり。

その空を見れば、先に捕まれたる怪物なり。その臥したる跡に人の骨おびただしく横たはりてあり。これより後は蒲原郡八彦の山に住み居りて、白昼にも人を取り食ひければ、古志郡・三島郡・蒲原郡は門戸を閉じて往来も絶えけり。

そのころ三島郡さがし谷寒若寺に、有徳のめでたき僧おはしけるが、万民の難儀を思ひやり給ひ、みずから香を燃き<sup>(マキ)</sup>つつ、独り八彦山に入り給ひければ、岩窟の口に臥したる者あり。仏家に云ふ、飛天夜叉也。銀針の如き髪を乱し、爪は鷲の如く、口は耳に裂け、なお女の情質まぬかれざるにや、綿帽子をかぶれり。男女の首四五五、骨とともに傍らにあり。その有様のおそろしき、なんとも譬えむものなし。

僧、印を結び給ひければ、夜叉、目を覚ましけるが身縮まりて動き得ず。僧、密呪を唱へ給ひければ、霜露の日に逢ふ如く、たちまちガラガラと消えて、ただ白骨を残せり。その齒、数枚を袖にして帰り給ひ、仏師に命じてその像を彫ましめ妙多羅天女と崇め、蒲原郡八彦に安置す。齒は寒若寺にあり。その像、綿帽子をかぶれり。

# 〔付記〕

著者の長沼太沖の略伝記が『旅もよう』（今泉駅―4）に載っているので引用する。「太沖は宝暦十一年（一七六一）、山形県長井市宮に生まれた。江戸・長崎でオランダ医学を修める。天保五年（一八四三）没。『牛の涎』は晩年の十一年間に執筆。全部で四四四九項目、五九卷。漢方医学、科学、軍事、音楽、地理、言語学、動植物、郷土の歴史、伝承、風俗に及ぶ。」



補足資料 3

※『牛の涎』卷三二に、右と同じ話が掲載されているが、そのあとに以下のごとく続く。

ある人云ふ。弥三郎が父は仏信者にて漁師なりけれども、漁するうちも口に念仏を唱へて止まず。海上に網を投じて引き廻すに、網外の魚みずから躍り網内に入ること常なりと。また、かの弥三郎は、昔、謙信公、越後御在城のころ家臣某（なにがし）の□地の百姓にてありし。その後、御家臣、今の代、米沢の家、これなりと。

また、弥三郎は、もと米沢□□村の百姓にて、その村に弥三郎屋敷とて屋敷跡あり。庭の李の木、なお存して今の代、なお李子を結びぬ。毎歳、その実熟しぬるころ一夜風烈して李子、その夜のうちに失せて一個も無くなりぬ。これはこの弥三郎が母、越後より李子を取りに来ると言ひ伝ふ。

補足資料 4

宝光院境内に建立されている石碑の文章。句読点をつけ、行替えを／で示した。

世の中の悪を正して／諸人を／救わん誓い／南無妙多羅天／山形県高畠町一本柳／喜久屋虎五郎／神意により吾子住人の／浄財にて建立／宝光院 沙門 良巖。

## 略記

明治三十七年二月廿日、高畠町八百屋安達屋に出生。十五才の時、宮内町星呉服店に店員見習いとして住込む。両親早生（「世」の誤記）により実家に還り、数年間學問を志し、講義録により独学し、大学教育迄教養を身につける自信をもち、東京及びその他の産地より直接仕入れして、小売り外店卸し迄行い、嬉々として商業に精出し、郡下一円に出張販売を続けること二十有余年。その頃、汗愛主義の修養団に入団し、心身鍛練して夏冬を通して水垢離をとること二十年間、又、気合い術を身につけ、各地の全国特別講修に進んで出席した。その間、和歌・俳句・詩吟・謡曲等は習得した。昭和三十年頃、佛舍利の真実の教えに帰依し、大慈会教団に入信し法華經を以て祈願回向供養懺悔行法を以て世の為尽くして三十年。神佛に聊か通じてか、不思議な体験現象数限りなく、余命有る限り貫き通す決心です。

## 合掌

昭和五十六年六月

## 補足資料5

## オッカナ橋の由来（船橋）

船橋から屋代の柏木目に通ずる道路を横切るように、和田川が流れています。

今では川底も浅くなりましたが、昔は水量も豊富で川幅も広く、なかなかの大河であり、岸边には榛や櫟の大木が茂り、昼もうす暗く気味の悪い処でありました。また、その大木の一本の幹は、大人二人が手を廻しても届かない太さで、中程が空洞になっていました。川には極く粗末な二本の丸太の橋がかかり、それが川を渡る

唯一の通路でした。

丈夫な橋にかけ替えた今も、俗に「オツカナ橋」と呼んでおり、その名前については、次のような話が伝えられています。

今から九百三十年程昔の前九年の役で、一本柳の館主度会（わたらい）家は、主君阿倍氏と共に源氏に亡ぼされ、主従は散りぢりとなっていました。そこで度会家の一子弥三郎は、何とかして我が家を再興しようと、妻子を母に預け、京に上って武芸を学び、諸国を廻って修行すること七年余り、天晴れな腕前となって故郷に帰ってまいりました。

こちら郷里の一本柳では、弥三郎の妻子は弥三郎が旅立った翌年、相ついで病死し、母（岩井戸）だけとなりました。母は弥三郎に合わせる顔がないといって嘆き悲しみ、七日間断食して白髪の姥となっていました。

それから後は、和田川の橋のたもとを根城とし、生き残った一族と共に軍用金を貯えて、弥三郎が帰ってきたら旗揚げさせようと、殺人強盗の張本人となり、悪鬼のように狼を馴らし、風を起こし雲を呼び、飛行自在に、飯豊・朝日・羽黒・月山等の山やまを駆け廻り、「弥三郎姥」と怖れられて悪事の限りを尽しておりました。

そういう事とは露知らず、弥三郎は妻子や母に会える喜びに疲れた足を励まして、日の暮れかかる頃、家まであと一息の橋のたもとにさしかかりました。

すると突然、狼の大群に取り囲まれてしまいました。故郷の土を踏まんとする今、無益な殺生は不吉とばかり、道の傍の漆の太木に登って難を逃れようしました。

その時、群の中から一匹の白い狼を従えた一人の老婆が、小刀を手にして漆の太木を登ってきました。そこ

で弥三郎も止むを得ず、腰の一刀抜く手を見せず老婆の右腕を切り落としたところ、老婆と今まで群がっていた狼は、さっとかき消すように逃げ去っていきましました。

木から飛び降りた弥三郎は、後を追いかけようとしたが、ついに老婆の姿を見失って追いかける事が出来なかったという訳で、追い兼ねてしまったところから「追兼（おいかね）橋」それが訛って「オツカナ橋」になったといわれています。

別に、橋のたもとの大木の空洞に住み着いた弥三郎が、通行人に害を加え、特に乳飲児を背負った人から強引に子どもを奪って、大木によじのぼり食べたので、「オツカナイ（おそろしい）橋」といわれ、それが「オツカナ橋」となったという説があります。

「文殊の里・昔むかし」より